

2010年度 修士論文

競技レベルの違いとコーチング・メンタルモデル
—X 県内高校サッカー指導者の事例研究—

The difference of competition level and coaching
mental model
—The case study of high school soccer coach in X
prefecture—

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 コーチング科学研究領域

5009A024-5

加藤 篤

Katou, Atsushi

研究指導教員： 堀野 博幸 准教授

目次

I.	序論	2
	1. 質的研究の意義	
	2. 先行研究	
	3. 研究目的	
II.	方法	9
	1. データ収集方法	
	2. 対象者	
	3. データ分析	
	4. 信頼性の検証	
III.	結果	13
	1. 指導者 A	
	2. 指導者 B	
	3. 指導者 C	
	4. 指導者 D	
	5. 指導者 E	
	6. 指導者 F	
IV.	考察	52
	1. 共通性	
	2. 特異性	
v.	結論	59
	引用文献	60
	謝辞	63

I . 序論

1. 質的研究の意義

スポーツの現場において、指導者は選手のパフォーマンス向上のための重要な役割を担っている。「スポーツの指導場面では、指導者は選手や自身を取り巻く状況が時々刻々と変化する中で即座に最適な判断を行い行動に移すことが求められる(北村ら, 2005).」とされているとおり、スポーツの指導者は、選手の年齢、性格、性別やその時々状況など、様々な要素が複雑に絡み合う中から、常に一番良い指導を選択することが求められる。また、北村ら(2005)が「こうした状況を捉え行動を決定する枠組みは”メンタルモデル”によって説明することが可能である。」と述べているとおり、指導者が現場での様々な事象を捉え、指導行動を決定するまでの枠組みを明らかにする研究として、近年日本でも質的な研究方法を用いたメンタルモデルの研究が行われてきた。

質的研究法についてフリック(2002)は、「具体的な事例を重視して、それを時間的、地域的な特殊性の中で捉えようとし、また人々自身の表現や行為を立脚点として、それを人々が生きている地域的な文脈と結びつけて理解しようとする分野」とし、その特徴としては「量的・演繹的方法を用いる場合と逆に、実証的データから新たに理論が作られるという点(フリック, 2002)」などを挙げている。また、ウィリッグ(2003)は、「『外れ値』を除去する大半の量的分析とは違って、質的研究は例外的なケースや特異性に注意を払うので、現象のより完全な理解が得られる。」と述べている。船橋(2005)は、質的研究法について、「心理学や社会学の中で、質的研究は長い歴史を持っている。」とした上で、「しかしながら、体育学、運動科学、スポーツ科学領域において、質的研究が頻繁に見受けられるようになったのは1980年代以降であり、この分野

では比較的新しい研究方法である（船橋，2005）。」と述べている。さらに船橋（2005）は、「スポーツ心理学においても調査・実験に代表される伝統的なアプローチに代わり得るものとして、多くの研究者が質的アプローチの重要性を主張している。」と述べている。

ではなぜ従来の量的研究方法を用いたアプローチに代わり、質的研究法がスポーツ心理学の分野において重要視されるようになったのであろうか。その背景として船橋（2005）は、以下のように述べている。

「たとえば、人間の関わる『現場』とはいくつもの要因が複雑に絡み合っており、それを細かく要素に分解してしまうのではなく、1つの集合体・連続体として解明しようとする。そして、既成の理論や概念枠組みでは捉えきれない、現場に密着したローカルな理論をデータから帰納的に生成していくことが特徴の1つである。（船橋，2005）」

つまり、従来行われてきた量的研究方法が、「実験室的環境の中で観察できない現象は敬遠されがちであった（森，2002）。」のに対し、様々な要素が複雑に絡み合うスポーツの指導現場そのものを一つの集合体・連続体として捉え、その中から理論や仮説を生成していくということが重要視されるようになってきたのである。

2. 先行研究

質的研究法を用いて研究されているテーマの1つにメンタルモデルがある。メンタルモデルについて北村ら（2005）は、「自分なりに理解した、対象を捉える枠組み」と述べ、Johnson-Laird(1983)は、「心の中でもつ表象（イメージ）であり、それを操作することによって問題を解決するのに使われるもの」と述べている。さらに、スポーツ指導者

が持つコーチング・メンタルモデルについて北村ら（2005）は、「指導者が選手の指導にあたり、心内に構築していく理解内容であると同時に指導の拠りどころとなるもの」と述べ、コーチング・メンタルモデルを明らかにすることで「その結果指導者の指導観、指導意図、及び指導行動の全体が明らかとなる（北村ら、2005）。」と述べている。

スポーツ指導者のコーチング・メンタルモデルを研究したものとしてCôté et al.(1995)による研究が挙げられる。Côté et al.(1995)は、カナダのエキスパート体操指導者 17 名を対象に、指導者が選手を指導する際に持つ指導コンセプト、戦略を明らかにすることを目的として研究を行った。質的調査分析の結果、試合・練習・運営という中心的要素が、指導者の指導哲学・理念などの個人的特性、選手の性格・特徴などの個人的特性、さらに環境面などの不確定要素と相互に影響を与えあっているモデルが示された。また Bloom(2002)は、チームスポーツの指導者を対象に研究を行い、Côté et al.(1995)のモデルが、チームスポーツの指導者においても妥当であることを示した。

サッカーの指導者を対象とした研究では、北村ら（2004, 2005）による研究が挙げられる。『教育情報』の視点による『コーチング』論再考～ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として～（北村、2004）」において、北村（2004）はブラジルのプロフェッショナル・サッカーチームで監督としてチームの指導に当たり優秀な実績を残している 12 名の監督及びコーチを対象として、指導者の「コーチング実践及びコーチング観」を明らかにするためにインタビュー調査を行っている。その結果、指導者の「コーチング実践及びコーチング観」として、「熟達化」、「意識化」、及び「支援」という 3 つのカテゴリーが示されている。

この論文の中で、「熟達化」とは、「(1)段階に応じたスキルの習得、及び(2)創造性の伸長、の 2 つのサブカテゴリーからなり、指導者によって設定された課題に専心していくプロセスを説明するカテゴリー（北村，2004）」であると述べられている。

また、「意識化」については、「練習の意味や意義を選手に認識させ、選手自身が自覚的に練習へ取り組む姿勢を引き出す重要性が認識されている（北村，2004）。」と述べた上で、「こうしたいわば選手からの関わり行動を引き出す指導様態としての『意識化』のカテゴリーは、(1)必要性の認知、及び(2)身体全体による専心、の 2 つのサブカテゴリーから構成されている（北村，2004）。」と述べている。

さらに、「支援」のカテゴリーについては、「(1)心的支援、及び(2)環境設定、の 2 つのサブカテゴリーからなる。選手が厳しい継続的な構造的練習に打ち込めるよう、心理的・物的・状況的な環境を常に最良の状態で維持する重要性が認識され実践されている。こうした選手を取り巻く生活全体への支援プロセスを説明する大カテゴリーとして作成された（北村，2004）。」と述べている。また、この研究における調査から、北村（2004）は、「選手は指導者によるかかわりを自らの文脈の中で再構造化することで意味や価値が生み出され、その結果、内発的に動機づけられ、自ら練習に没頭していくという、選手自身による一連の意味形成の過程が見て取れた。」と述べた上で「こうした過程は人的物的環境設定によって支援される中で成立していくものであり、こうした支援の対象となる選手の主体的な取り組みを喚起させ意味や価値を生み出す行動傾向を作り出していく過程としてのコーチングは、まさに『教え学ぶ中で作用する意味を帯びた知』としての『教育情報』そのものを産出する作用として捉えることができた（北村，2004）。」と述べている。

また、「優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？－質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築－（北村ら，2005）」の中で，北村ら（2005）は高等学校サッカー部で監督として選手の指導にあたっている8名の指導者を対象に，彼らのコーチング・メンタルモデルを明らかにしている．

この論文の中で北村ら（2005）は，エキスパート高等学校サッカー指導者の選定条件として「(1)サッカー指導者としての指導歴が10年以上，(2)監督として指導にあたったチームを継続的に勝利へ導いた実績を持つ(過去10年間に全国レベルの大会で5回以上ベスト8に入る)，(3)各年代の日本代表選手あるいはJリーグ選手等の優れた選手を継続的に育成している，及び(4)日本サッカー協会等に所属する第3者的な複数の専門家から優れた指導者として高い客観的な評価を得ている（北村ら，2005）」という4点を挙げている．

インタビュー調査の結果，エキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルとして，ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者と同様「熟達化」，「意識化」，及び「支援」という3つのカテゴリーが示された．

この論文の中で「熟達化」は，「サッカーのパフォーマンスに関わるスキル向上を目指した一連の指導的関わりを説明する大カテゴリー（北村ら，2005）」であり「『基礎技術の習得』，『個性の伸長』及び『多様性の涵養』の3つのサブカテゴリーにより構成されている（北村ら，2005）」と述べられている．

「意識化」については，「選手がサッカーへ向かう姿勢や思考力の育成を目指した指導的関わりを説明するもの（北村ら，2005）」であり「『課

題の意味付与』、『必要性の認知』、及び『思考の習慣化』の 3 つのサブカテゴリーにより構成されている(北村ら, 2005).」と述べられている。

「支援」については、「選手とサッカーとの直接的及び間接的なつながり全体を支える指導的関わりを説明するもの(北村ら, 2005)」であり『心的支援』及び『環境設定』の 2 つのサブカテゴリーから構成されている(北村ら, 2005).」と述べられている。また、コーチング・メンタルモデルとしてはこれら 3 つのカテゴリーが相互に作用し合い、「選手の自立」、「スキル獲得」に繋がり、それが「選手の人間的成長」、「サッカーのパフォーマンス向上」に繋がっているモデルが示されている。

3. 研究目的

北村ら(2004, 2005)の研究の中で示されたコーチング・メンタルモデルは、ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者、エキスパート高等学校サッカー指導者ともに「熟達化」、「意識化」、及び「支援」の 3 つのカテゴリーから構成されていた。しかし、日本とブラジルにおいて、サッカーの競技レベルは大きく異なる。国際サッカー連盟(以下 FIFA)の世界ランキングでは、日本が 29 位なのに対しブラジルは 4 位と高い成績を収めている(FIFA, 2010 年 12 月 15 日閲覧)。また、ユース年代においても、過去 5 大会の U-17 ワールドカップにおいて、ブラジルは 5 大会全てに出場し、優勝、準優勝、ベスト 8、ベスト 16、予選グループリーグ敗退という成績をそれぞれ 1 回ずつ収めている。それに対し、日本は 3 大会出場しているが、3 大会全て予選グループリーグ敗退という成績である(FIFA, 2010 年 12 月 15 日閲覧)。このことから研究者自身は、競技レベルに関わらず、指導者は同じようなコーチング・メンタルモデルを持って指導しているのではないかという疑問を持った。しかし、

その点に関しての記述は、北村ら（2004，2005）の論文に記されていない。また、北村ら（2004，2005）の論文で示されたコーチング・メンタルモデルが、プロフェッショナル・サッカー指導者，エキスパート高等学校サッカー指導者に限ったモデルなのかという点についての検討も不十分である。さらに、これまでのコーチング・メンタルモデル研究では、全国レベルの大会や国際レベルの大会で優れた競技成績を収めている選手やチームの指導者を対象にしたものが多く、都道府県レベルや地区レベルの大会で優れた成績を収めているチームの指導者を対象にした研究は見当たらない。

そこで本研究では、都道府県レベルの大会で上位の成績を収めている高等学校サッカー部の指導者を対象に、指導者がどのようなコーチング・メンタルモデルを持って指導にあたっているかを明らかにすることを1つ目の目的とする。また、どのような部分に共通性が見られ、どのような部分に特異性が見られるか、さらにそれが競技レベルとどのような関係にあるのかを検討し、明らかにすることを2つ目の目的とする。

しかし、都道府県レベルの大会で上位の成績を収めている全ての高等学校サッカー指導者の考えについて深層的に探るのは、あまりに対象が多すぎるため物理的に不可能に近く現実的ではない。そこで本研究では、X県の指導者の事例を対象とした。X県の指導者を対象に選んだ理由は、X県は高等学校の数が全国で5本の指に入るほど多いにも関わらず、平成4年度以降の全国高校サッカー選手権大会においてベスト4以上の成績を収めていないことから、先行研究で対象とされたエキスパート高等学校指導者とは異なったコーチング・メンタルモデルが構築できるのではないかと考えたからである。また研究者自身がX県の高等学校サッカー指導に携わっており、本研究がX県サッカー発展の一助となればと思

い、X 県を対象とした。高等学校年代の指導者を対象とした理由としては、「日本における選手指導システムは、学校での運動部活動といった独自の文化的背景に大きく影響されている。したがって、日本におけるコーチング・メンタルモデルを明らかにする上では、学校での運動部活動の指導者を対象とした研究が不可欠である（北村ら，2005）。」と北村ら（2005）によって述べられており，その上で「特に，学校運動部活動の中でも高等学校年代の指導者は，選手の年齢的な発達特性により，勝利という結果と同時に将来的に自立できる選手の育成という『幅広い役割』（Gilbert & Trudel, 2004）を担う意味で，複雑なコーチング・メンタルモデルが存在すると考えられる（北村ら，2005）。」と述べられていることから，本研究の対象とした。

以上のことを踏まえ，本研究では，（1）県大会上位レベル指導者のコーチング・メンタルモデルを明らかにすること，（2）県大会上位レベル指導者のコーチング・メンタルモデルの共通性，特異性と競技レベルとの関係を検討し，明らかにすること，の 2 点を研究目的とする。

Ⅱ．方法

1. データ収集方法

本研究では，指導者の指導行動がどのような哲学，価値観，知識，信念，理念に基づいて生起するののかについて深層的に明らかにするため，1 対 1 の半構造的 (semi-structured)，深層的 (in-depth)，自由回答的 (open-ended) インタビューによりデータ収集を行った。インタビューは，指導者の指導している学校施設内で行い，平均時間は約 60 分であった。インタビューに先立ち，やまだ（2007）と北村ら（2005）の先行研究を参考に，①対象者の体験や認識について幅広く回答が得られるような基

基幹的質問（main question）、②語られたテーマ、意味、考え等についてその意味をより明確にさせる追跡的質問（follow-up question）、③語られた内容に的を絞って更に深く掘り下げる探索的質問（probes）、の 3 種類を組み合わせたインタビューガイドを作成し、予備実験を繰り返しながら質問項目や質問順序の精査とインタビューの練習を行った。基幹的質問としては、具体的に、下記の 4 つの質問を設けた。

- (1) 練習中に選手に要求することは何ですか。
- (2) 試合中に選手に要求することは何ですか。
- (3) 学校生活において選手に要求することは何ですか。
- (4) 指導の中で最も大切にされているのは何ですか。

対象者には、インタビューの概要を理解してもらうため予め基幹的な質問項目を郵送した。インタビュー当日は、原則として予め作成しておいたインタビューガイドの質問項目に沿いつつ、インタビューの流れに応じて指導者の哲学、価値観、知識、信念、理念を具体的、深層的に明らかにするため柔軟に変化させながらインタビューを行った。インタビューは、研究者自身が行い、インタビュー内容は対象者の承諾を得た上で、音声はボイスレコーダーに録音し、映像はビデオカメラに録画した。

2. 対象者

本研究では、X 県内の高等学校サッカー部で監督として選手を指導している 9 名の指導者を対象とした。対象者の選定条件は、下記の 3 つを設定した。

- (1) 過去 5 年間、全国レベルの大会に出場した経験を持たないチームの指導者。
- (2) 過去 5 年間の全国高校サッカー選手権 X 県予選で県大会ベ

スト 16 以上の成績を 2 回以上納めているチームの指導者。

(3) 現在のチームで 5 年以上指導を行っている指導者。

はじめに(1)を選定条件にした理由は、北村らの先行研究(2005)で対象となったエキスパート高等学校サッカー指導者との区別化を図るためである。県大会で上位の成績を収めたチームは、県の代表として全国大会に出場している可能性が高い。しかし、全国大会出場レベルまで対象に含んでしまうと、先行研究で対象とされたエキスパート高等学校サッカー指導者との違いが曖昧になってしまい、研究目的とは異なってしまふ。そのため、県大会上位レベルの上限を設定し、先行研究で対象となったエキスパート高等学校サッカー指導者との区別を明確なものとするため、(1)の選定条件を設けた。また、過去 10 年間ではなく 5 年間としたのは、北村(2004)の先行研究を参考に、公立高等学校の指導者の異動等を考慮してのことである。次に、(2)の選定条件を設定することで、県大会上位レベルの下限を設定でき、サッカー部に生徒が集まらない学校や、指導者のいない学校、組み合わせの偶然性などで県大会に出場できなかった学校などを除くことができた。さらに、前任の指導者の影響を排除するため、(3)の選定条件を追加した。

本研究では、これら 3 つの選定条件により、精練された県大会上位レベル指導者を選定することができた。本研究では、選定した対象者 9 名のうち 6 名のインタビューに成功した。対象者は全て男子サッカー部を指導する男性指導者で、5 名は私立高校の、1 名は公立高校の部活動の指導者であった。

3. データ分析

インタビューによって得られたデータは、研究者自身によってテキスト

ト化された後に分析された．分析は，Côté et al.(1993)による質的データ分析法に基づき分析された．分析は，下記の 3 つの段階を経て行われた．

(1) 標題作成

(2) サブカテゴリー作成

(3) カテゴリー概念化

まず，(1) 標題作成とは，テキスト化されたインタビューデータから，それ自身が 1 つ以上の情報，意味を持つことによる分かり易いテキストの区分の概念あるいは見解を含む意味単位 (meaning unit) を抜き出し，その 1 つ 1 つに標題をつける作業のことで，指導者の指導における哲学，価値観，知識，信念，理念に関係した意味単位のみを抽出し，分析の対象とした．次に，(2) サブカテゴリー作成とは，全ての標題を比較検討し，類似した内容を持つ意味単位どうしを共通の上位概念で括れるサブカテゴリーへとまとめ，それぞれのサブカテゴリーに標題をつける作業のことである．そして，(3) カテゴリー概念化とは，再編成されたサブカテゴリーを比較検討し，さらに抽象度の高いカテゴリーへとまとめる作業のことで，コーチング・メンタルモデルに関する新しいカテゴリーの再編成やカテゴリー相互の関連性がそれ以上新たに見出せなくなるまで検討が加えられた．なお，本研究では，それぞれの指導者がどのような考えを持ち，現場で指導にあたっているかを明らかにするため，指導者の考えの共通性，特異性の観点から分析を行った．

4. 信頼性の検証

信頼性の検証については，Culver et al.(2003)が推奨する方法を参考に行った．まず，インタビューの方法や手順，データ分析方法を可能な

限り明らかにし，どのような過程で研究が行われたのかを明示することにより信頼性が高まった．さらに，インタビューデータのテキスト化からカテゴリー編成，コーチング・メンタルモデルの構築までの分析作業を，質的研究法を2年以上経験している2名の共同研究者とともに随時点検しながら行い，全員の合意が得られるまでカテゴリーの再編成を繰り返した．これにより，データ分析の客観性を確保した．また，インタビューを半構造的にすることで，対象者へのインタビュー内容が均質化され，データ収集の確実性が高まった．さらに，インタビューに先立ち，対象者と同じく高校サッカーの現場で指導にあたっている指導者に予備実験を繰り返すことで，対象者に分かり易く馴染みの深い言葉を選んで質問することができた．このことによって対象者の哲学，価値観，知識，信念，理念に関するデータを具体的，深層的に収集することができた．また，インタビューに先立ち予備実験を繰り返すことで，誘導的な質問にならないように質問を精査することができた．

本研究では，これらの方法により信頼性を確保した．

Ⅲ． 結果

1. 指導者 A

20 ページにわたるインタビュー・トランスクリプト・データから 142 の意味単位が得られ，12 のカテゴリーに分類された．これらは最終的に「取り組む姿勢」，「選手支援」，「人間教育」，及び「行動を起こす」の 4 つの大カテゴリーに分類された(表 1(A)-(D))．以下，指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーについて分析過程を詳述していく．

1) 取り組む姿勢

表 1 (A) 指導者 A 階層的カテゴリー「取り組む姿勢」

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	取り組む姿勢が重要	やるときは集中してやる	練習においてメリハリとけじめを持つ 一つ一つ集中して練習する
		主体的に取り組む	強い気持ちで練習に臨む姿勢 元氣よく、自分がやるという姿勢
		努力する姿勢	一生懸命努力するから天才が開く いかに努力できるか、一日一ミリでもいいから上手くなる
		取り組む姿勢が重要	全てに共通するのは物事に取り組む姿勢 取り組む姿勢・精神的な部分 何事もいい加減にやったら身に付かないから姿勢を一番求める 何に関しても姿勢を求める 姿勢がしっかりしてる者はどこかできっかけをつかんで必ず伸びる 試合に臨む時もまず姿勢が大事
		闘う姿勢	公式戦の場合は80分間闘い抜く 先行しようがリードされようが慌てず80分間闘い抜く 試合は戦争と一緒、体を張るのは当たり前
	精神面のコントロール	精神面のコントロール	公式戦では委縮させないようにする 公式戦は委縮させないように上手くおだてる 公式戦は緊張を解く精神的なコントロール 精神統一、自分でモチベーションを高めた上でピッチに入る 公式戦であれ何であれ選手を発奮させる
		程よい緊張感を持つ	公式戦では程よい緊張感を持つ 気の抜けたプレーは論外なので指導する 程よい緊張感のなかでプレーする
		試合を楽しむ	どんなゲームでも楽しむ ゲームの楽しさ、サッカーをやる喜びを感じて欲しい サッカーの楽しさは105×68のコートで試合をすること 余裕を持ってゲームを楽しむ
	仲間と想いを共有する	仲間と助けあう	サッカーはチームプレーで助け合いが必要 自分ができるから良いではなく、できない者をいかにサポートするかを習慣づけ
		仲間と想いを共有する	プレーできなければ仲間に想いを託す 自分の意見をお互いにぶつけ合えないと良くならない 仲間の色々な想いを感じてユニフォームを着て欲しい チーム、仲間の為にも頑張るという重みを感じて欲しい
		仲間と声を掛け合う	元氣を出し、集中し、みんなで声を出して闘う 集中を切らさないように声を出す 気がついた奴がどんどん声をかける
		プライドと自覚	プライドと自覚を持たせる みんなの中の代表というプライドと自覚を持たせる プライドと自覚を持たせるために、ユニフォームは手渡しする
	課題を意識づけ、克服する	気づきを整理しておく	サッカーに関する日ごろの気づきを書いて整理しておく サッカーをやることと並行して自分の気づきを書いておく
		課題を意識づける	サッカーノートを通じて課題の意識づけができた 課題を個人的に言わなきゃいけない時に言う ゲーム直前には練習でやってきたことを確認し、意識づける 練習と練習試合では敢えて厳しい言い方もする サッカーノートを作ってサッカーのことをまとめさせる
		練習の成果を発揮する	技術的なことを言えば練習でやってきたことを出すことを要求する 練習でやったことを出さないと次の課題が見えない 練習でやったことをチャレンジする 練習したことをゲームで出し、その課題を練習する、の繰り返し 練習の成果を出すことを意識づける
		課題を克服する	チームの課題を克服するまでやる チームの課題を克服するまでやる

「取り組む姿勢」の大カテゴリーは「取り組む姿勢が重要」、「精神面のコントロール」、「仲間と想いを共有する」、及び「課題を意識づけ、克服する」

服する」という 4 つのカテゴリーにより構成されている。

まず、「取り組む姿勢が重要」に関して指導者 A は、全てにおいて「やはりまず姿勢．物事に取り組む姿勢．」を選手に求めると述べている．具体的にどのような姿勢を選手に求めているかについて、指導者 A は練習場面ではメリハリ，けじめ，練習への集中，などの言葉を挙げていた．また，試合の場面においては闘う姿勢を要求していると述べていた．学校生活の場面においても，「勉強であれ何でもそうだと思うんですよ，趣味でも．いい加減にやっていたら何も身に付かない．」と述べ，取り組む姿勢の重要性を述べている．

次に，「精神面のコントロール」について指導者 A は，「練習でも試合でもピッチに入る時にいい加減な気持ちで入るな，自分で精神統一したり自分でモチベーションをしっかりした上で，タッチラインを跨いで入っていけとかね，そういう言い方よくしますよ．」と述べ，主に試合場面について述べていた．具体的には，「緊張しろって，逆にね．でも程よい緊張にしろとか，それはもう言ってますんで．」と述べ，程よい緊張感を保ちながら試合に臨むことを選手に求めている．そのために，指導者 A は，「上手くおだてるところはおだてて，当然時には怒りますけどね」と，自身の具体的な行動について述べている．また，指導者 A は，「ゲームの楽しさ，ゲームをやる喜びを感じてほしい．」と述べ，試合中に精神的な余裕を持ち，ゲームを楽しむことで選手は力を発揮できると考えていることが明らかとなった．

次に，「仲間と想いを共有する」について，指導者 A は，「サッカーって言うのは今言ったようにチームプレーで助け合いが必要なんで．」と述べ，仲間とサポートし合う姿勢を選手に求めている．具体的には，「自分ができているから良いやじゃなくて，できてない者がいたらそれをど

うやってサポートするか」ということや、「自分は前半までなら『頼むぜ後半』とかね，そういう気持ちでやらないとだめだ」といったことなどを選手に伝えていると述べている．また，「自分の意見をお互いぶつけあいながら，サッカーって言うのは集団競技なんでお互いのコミュニケーションとかを取らないと」と述べていることから，仲間どうしサポートし合い，助け合うだけではなく，時にはお互いの意見をぶつけ合うことも必要だと考えていることが明らかとなった．

次に，「課題を意識づけ，克服する」について，指導者 A は，「サッカーノートを作らせてサッカーのことをまとめさせる．」ということを選手に対して行っていると述べていた．また，サッカーノートの効果について指導者 A は，「変化した部分って言うかやっぱり意識させることはできていると思うんですけどね．」と述べ，選手が自身やチームの課題を整理し，意識するのに役立っていると述べていた．さらに「うまくなろうって奴はノートもきれいに書く，これは勉強と一緒にすよね．」と述べた上で，「先生が書いた板書に対してね，丸映しの者もいるかもしれないけど，それに対してプラスアルファ書く者もいるだろうしやっぱり整理の仕方がしっかりできている者は練習もやっぱしうまくなる」と述べ，選手のサッカーに対する姿勢を観る手段としても活用していることが明らかとなった．

以上のようなことから指導者 A は，サッカーは勿論のこと，その他の物事に対しても「取り組む姿勢」を重要視し，指導にあたっていることが明らかとなった．

2) 選手支援

表 1 (B) 指導者 A 階層的カテゴリー「選手支援」

選手支援	選手との信頼関係	指導者と選手の信頼関係	人間同士だから信頼関係が大事 信頼関係ができていれば色々な指導が伝わる
		指導者が選手の模範になる	指導者にはバイタリティーさが重要 指導者が選手の模範となる
	愛情があった上での厳しさ	愛情があった上での指導	言われてるうちが華ということを意識させる 殴られる・蹴られる経験は今振り返るといい経験 今の高校生のレベルだと厳しく指導したいが、社会情勢的に難しい 物事全て愛情がないとできない
		きっかけを与える	色々なきっかけを与えて当事者がどうするか 本人が気づき変わるきっかけをいかに与えるかが重要

「選手支援」の大カテゴリーは「選手との信頼関係」、及び「愛情があった上での厳しさ」という 2 つのカテゴリーから構成されている。

まず、「選手との信頼関係」について指導者 A は、「人間同士なんで、信頼関係って言うのを大事にしないといけない。」と述べ、指導の意味や意図を選手に伝えるためには、選手との間に信頼関係があることが重要であると述べている。また、「当然選手たちに言っていることに対して自分もやらなきゃいけないだろうし、自分の考え教えていうのを理解してもらう、だから自分のできることをやる。」と述べ、選手との信頼関係を築くためには、まずは自身が選手の模範となり、考えや教えを実践することが重要であると述べている。

次に、「愛情があった上での厳しさ」について、指導者 A は、自身が学生時代に受けてきた、殴られる・蹴られる指導を「今振り返ればいい経験したなと思っていますよ、自分自身。」と述べた上で、そういった指導に関して「物事全て愛情なきゃできないんですよ。」と述べている。指導者 A 自身、そのような指導を肯定しているわけではなかったが、近年の高校生に関しては、「それくらい厳しくさせないと無理じゃないですか今の高校生レベル。ホントは中学でもやった方がいいだろうし、あれですけど、なかなか今のね、社会情勢がやっぱり難しいですね。」と述べて

いる。これらのことから、指導者 A は、選手との信頼関係のもと、愛情を持って厳しく指導することの必要性を感じてはいるが、社会情勢がそれを許さない雰囲気にあることに難しさを感じていることが明らかとなった。

また、厳しく指導できない状況下において、選手が自ら気づけるようなきっかけを、いかに指導者が与えられるかが重要であると考えていることも明らかとなった。

以上のことから、指導者 A は、選手を指導する際に「選手との信頼関係」を築いておくことや、愛情を持って選手に接することが重要であると考えていることが明らかとなった。しかし、厳しく指導することに関しては、社会情勢的な難しさを感じていることも明らかとなった。

3) 人間教育

表 1 (C) 指導者 A 階層的カテゴリー「人間教育」

人間教育	一番大事なのは人間教育	一番大事なのは人間教育	サッカー・学校生活と人間教育が指導すること サッカー・勉強・人間教育の3点セットを大事にする 3つの中で一番大事なのは人間教育 人間教育の抜けてる者は努力できず、中途半端に手を出して辞める 人間教育の抜けてる者は一つのことを信じてやりきれない サッカーの技術戦術以前に人間教育を指導 サッカーの指導も人間教育が基本の土台
	学校生活、私生活がサッカーに繋がる	学校生活、私生活がサッカーに繋がる	学校生活がいい加減だとサッカーがうまくならない 私生活、学校生活がいい加減な者がサッカー上手くなるのは無理 私生活がいい加減なやつはここ一番苦しくなった時ポロが出る 私生活がいい加減だとサッカーがうまくならない、という経験は嘘をつかないもの 私生活がいい加減なやつは逆境に立たされた時、ポロが出て立ち向かえない 私生活からこつこつやる子は逆境に立たされた時にできる ノートがいい加減なやつは練習もいい加減 上手くなるうとするやつはノートもきれいに書く ノート整理の仕方がしっかりできてる者は練習もうまくなる
	学生のうちに人間性を鍛える	聞く耳を持つ	いくら良い知識を伝えても人間性がなければ伝わらない 聞く耳の持てない者は成長しない 相手の意見を聞くことで自分の考えが広がる
		常識・マナー・道徳について厳しく言う	生きていく上で身だしなみや挨拶は重要 常識・マナー・道徳について厳しく言う 勉強、挨拶、身だしなみという人間教育
		責任を取らせる	子供に責任を取らせる 子供に責任を取らせないと過ちの重さが分からない
		学生のうちに鍛える	学校生活をエンジョイする 学生のうちは自分を鍛え、磨く期間 学生は自分を鍛える期間なのでまだまだ甘い 学生はアマチュア、働いている人はプロ
		社会に出た時を考えて指導	その時負け組でも社会に出てからが重要 社会人になった時に自分が納得する勝ち組になる ホントの勝ち負け組は死ぬ間際に分かる 自分がその時の価値観の中で納得してればそれは勝ち組 社会に出た時を考えて指導 社会人になってからが本当の勝負
		社会に出てから馬鹿にされないようにする	社会で馬鹿にされないように人間偏差値を高める 社会に出てから馬鹿にされないようにする 社会人になって馬鹿にされたり屈辱を味わうのはとてもないこと 馬鹿にされる人間にならない

「人間教育」の大カテゴリーは、「一番大事なのは人間教育」、「学校生活、私生活がサッカーに繋がる」、及び「学生のうちに人間性を鍛える」という 3 つのカテゴリーから構成されている。

まず、「一番大事なのは人間教育」に関して、指導者 A は、指導の中で一番大切にしているものとして「当然人間教育でしょ．」と述べている。なぜ「人間教育」を大切に考えているかについて、指導者 A は、「それが抜けてるやつは努力すらできないんで、みんな中途半端に手は出すものの辞める．」、「一つのことを信じてやりきれない．」と述べている。

次に、「学校生活、私生活がサッカーに繋がる」に関して、指導者 A は、「サッカーがうまくなるためには学校生活がいい加減じゃうまにならない」という考えを持っていることが明らかとなった。その理由として、指導者 A は、「いい加減なやつは本当に逆境に立たされた時にボロ出ますよ．立ち向かえないですよ．」、「それはもう 29 年間やってきて見えた、そういうボロを．それは嘘つかない．」と述べていることから、自身の指導経験からそのような考えを持つようになったことが明らかになった。

「学生のうちに鍛える」ことに関して、指導者 A は、社会に出てから馬鹿にされる人間にならないように、学生のうちから常識やマナーや道徳などについて厳しく指導していると述べていた。

これらのことから指導者 A は、選手が社会に出た時に馬鹿にされる人間にならないよう、選手の人間性を高めることに最大の重点を置き指導していることが明らかとなった。

4) 行動を起こす

表 1 (D) 指導者 A 階層のカテゴリー「行動を起こす」

行動を起こす	観て、判断して、行動する	観て予測して状況判断	常に周りを観て想定・意識しておく 予測や準備が考えることに繋がる 予測するために見る、その上で状況判断 周りを見ることが状況判断のところで重要
		常に考えてプレーする	自分で練習を噛み砕き、理解してやる 試合につながる練習になるように常に考えてやる 常に考えてやる 全て自分で考えてやらないと身に付かない やらされてると身に付かない プレーするのは選手
		考える力を身につけさせる	最近の生徒は精神年齢が低く、知恵が少ない 生活知能指数、IQが高ければ勉強もやる 知識だけでなく知恵が考えることに繋がる 勉強偏差値より生活知能指数・IQの方が重要 余計な手出しはせず、こどもに考えさせる
	行動を通して学ぶ	行動を通して自ら学ぶ	自ら学ぶ、学習することを要求する 見て学ぶ、真似することが学習すること やらせることを通して自ら学ぶようになって欲しい まず体で覚え、あとで「そういうことなんだ」と納得させるのが一番良い まずは自分がやる。その行動を生徒がどう捉えるか。 自分が動いて観た上で判断する 百聞は一見に如かず。自分で動き、観て、判断する 自分が動いて観ることで視野が広がる 疑問に思えば素直に取り組む 自分が動いて観てみる
		失敗が成長に繋がる	意図のある積極的なミスは構わない チャレンジしてのミスは構わない たくさん経験し、たくさん失敗することが成長へと繋がる
	行動することが大事	やらせることの重要性	身体で身につける為にやらせることも重要 口で言って覚えるって言うのはなかなかできない
		行動することが大事	理屈云々よりも体で覚える 感覚と理屈はどちらが先でも良い 理屈は後から、まずやってみる まずやる、行動することが大事 結果や失敗を考えると動けなくなるので、なりふり構わず動く まず動く、やってみる ミスしてもいいからやる
		自分にできることを一生懸命にやる	その時の自分にできることを一生懸命にやる 気負わず今自分にできることを確実にやる
		意識しなくても行動できるのが理想	予測や状況判断ができていれば、自然と身体に身につく意識しなくても行動でき、意識しなくてもできるのが理想

「行動を起こす」の大カテゴリーは、「観て、判断して、行動する」
「行動を通して学ぶ」、及び「行動することが大事」の 3 つのカテゴリ
ーから構成されている。

まず、「観て、判断して、行動する」ことに関して、指導者 A は、練習、
試合などのサッカー場面においては「常にサッカーって瞬時の判断です
よね。零コンマ何秒の。だから常に周りを見てろとかね。自分がボール
もらったら何ができるかをもう想定して、まあ意識してろとか。」とい
うことを選手に伝えている。また、学校生活などの場面においては、「良

く言うんですけど知識じゃねえんだ，知恵なんだってね．まあさっき言った考えるに繋がるんですけど．」と述べ，考えて行動する力を重要視していることが明らかになった．

次に，「行動を通して学ぶ」に関して，指導者 A は，「百聞は一見に如かず」という言葉を用い，動き，観て，判断することで物事を様々な角度から捉えることができるようになる」と述べている．選手が自ら行動することや，やらされていることを通じ，「そうすることによって『ああ，そういうことなんだな』と全て納得して」学習してくれることが重要であると述べている．

次に，「行動することが大事」に関して，指導者 A は，「初めは分かんなくても，ハードルやって後で理屈で覚えてくれれば良いかなと思って，って言うのはありますよね．」と述べ，まずは選手が行動を起こすこと，選手に行動を起こさせることが大事であると述べている．また，指導者 A は，失敗を考えると行動できなくなると述べ，結果を考えずにまずは行動してみることが成長に繋がると考えていることが明らかとなった．

以上のことから，指導者 A は，まずは身体を動かし，行動を起こすことが重要であると考え，その行動を通じて選手が学習することが重要であると考えていることが明らかとなった．

5) 指導者 A のコーチング・メンタルモデル

指導者A

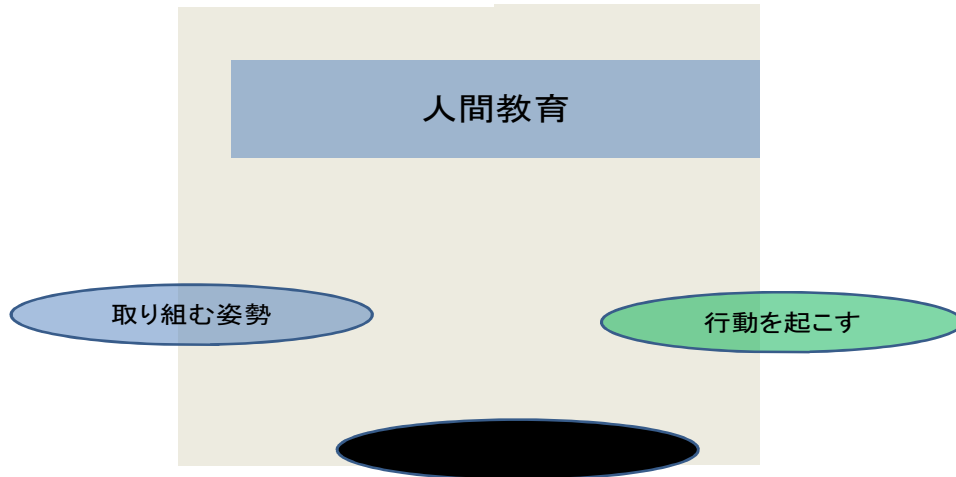


図 1 指導者 A コーチング・メンタルモデル

以上のことから指導者 A は、「人間教育」の指導に一番の重きを置き、その中で、「取り組む姿勢」や「行動を起こす」ことを選手に伝えていることが明らかとなった。また、「取り組む姿勢」や「行動を起こす」ことを伝え、選手の人間性を高めるために、指導者がどのように選手に接するかが大切であると考えていることが明らかとなった。このことから、図 1 に示したモデルが形成された。なお、後に示す他の指導者のデータと比較し、「行動を起こす」という部分に指導者 A の特異性が見られたため、「行動を起こす」のカテゴリーは色付けして示した。

2. 指導者 B

8 ページにわたるインタビュー・トランスクリプト・データから 66 の意味単位が得られ、5 つのカテゴリーに分類された。これらは最終的に

「取り組む姿勢」、「選手支援」、「人間教育」、及び「パフォーマンス向上」の4つの大カテゴリーに分類された(表2(A)-(D))。以下、指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーについて分析過程を詳述していく。

1) 取り組む姿勢

表2 (A) 指導者 B 階層的カテゴリー「取り組む姿勢」

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	サッカーに取り組む姿勢	勝ちにこだわる	勝つことがすべてじゃないが勝負事なので勝ちを求める 勝負にこだわる 勝った方が伸びしろは高い
		サッカーに取り組む姿勢、気持ち	自分をしっかり管理でき、追い込んでいける選手は伸びる いつも自分で自分を追い込めるかが重要 全てにおいて妥協を嫌う 一瞬の喜びの為に多くの苦しみがある 向上するには常に高いモチベーション、集中力が大事 全て100%でやる 上手い下手ではなく一生懸命やってるかどうか重要 向かっていくような反骨心が絶対必要 現役を続ける限りはこれで良いということは絶対ない
		考えてプレーする	サッカーはタイムがないので練習も長い時間やらない 短い時間の中で考える力・状況判断が大事 10のうち7教え、あとの3は考えさせる サッカーでは創造性の部分がかなりある 自分や味方の得意なプレーを考えてプレーすることが大事 上手くなるためにはなぜ言われたか考えることが必要 ミスを自分たちで分析し、原因を考えさせる 分析したうえで改善のための工夫を考える
		自分の持ち味を知る	選手の身体によって持ち味が変わる 自分自身を知り、伸ばすためには練習以外での練習が必要 自分や味方の特徴を分けることが大切

「取り組む姿勢」の大カテゴリーは、「サッカーに取り組む姿勢」のカテゴリーから構成されている。

「サッカーに取り組む姿勢」について指導者 B は、「勝ちにこだわる」姿勢、「サッカーに取り組む姿勢、気持ち」、「考えてプレーする」姿勢、及び「自分の持ち味を知る」姿勢の4つを述べている。「勝ちにこだわる」姿勢について指導者 B は、「やっぱり負けるよりは勝ってった方が絶対伸びしろは高いと思うしね。」と述べ、勝つことが選手の成長に繋がると考えていることが明らかとなった。「サッカーに取り組む姿

勢，気持ち」について指導者 B は，妥協なく自分を追い込むことを述べていた．また，「だからうまい下手じゃないんですよ．一生懸命やってるかやってないかなんですよ．」と述べていることから，パフォーマンスの優劣に関わらず，取り組む姿勢が重要であると考えていることが明らかとなった．「考えてプレーする」姿勢に関して，指導者 B は，自身が欧州に遠征した際に見た指導者を参考に，選手に教えすぎないように気をつけ，なるべく選手に考えさせるようにしていることが明らかとなった．さらに「自分の持ち味を知る」姿勢に関して，指導者 B は，「思いやりとかなんかっていう言葉を，使うなら使ってもね，まあそれがベストかどうか分かんないけどね，特徴っていうものをね，やっぱりこう分からなきゃいけない年でもあるしね．」と述べ，自分と味方の特徴を理解し合うことで，お互いの長所を生かしてプレーすることができると考えていることが明らかとなった．

これらのことから，指導者 B は，サッカーに「取り組む姿勢」だけでなく，サッカー以外のことにも通じるように「取り組む姿勢」を伝えていることが明らかとなった．

2) 選手支援

表 2 (B) 指導者 B 階層的カテゴリー「選手支援」

選手支援	指導者の伝える姿勢	指導者が妥協せず伝える	高校レベルは競技スポーツ、アスリートになっていくため厳しいことも言 基本的に妥協すると選手に伝わっていかない 今すぐじゃなくても選手に分かってもらえる時期がある
------	-----------	-------------	--

「選手支援」の大カテゴリーは，「指導者の伝える姿勢」のカテゴリーから構成されている．これについて指導者 B は，「高校のレベルって言うのはやっぱり競技スポーツで，ある意味アスリートになっていくサッカーだから，厳しいことはこっちも言う．」と述べ，「小学校とか低学年

の時の楽しく面白く」行うサッカーと高校サッカーは異なると考えていることが明らかになった。また、厳しく指導することに関しては、指導者が妥協すると選手に伝わっていかないと考え、今すぐにではないがいつか選手に分かってもらえる時期が来ると考え、指導していることが明らかになった。

3) 人間教育

表 2 (C) 指導者 B 階層的カテゴリー「人間教育」

人間教育	社会で通用する選手の育成	相手に不快を与えない	時間をしっかり守れることが大事 相手に不快なことを与えないよう指導する サッカーしてる人は自分の主張を持つてる 選手の性格等もあるので、全員が感じ取るのは難しい 人間性の指導は部活動だからではない 身だしなみをしっかりする 身だしなみといったTPOを大事にする
		世の中の厳しさを教える	世の中がどれほど厳しいか教える 最終的に社会に出てからの方が人生は長いから重要 仲間として世の中の厳しさを指導する 最終的に世の中に出た時を考えて人間性を指導する 生活面がだらしない者にはうるさく言う 勉強するのは当たり前のこと 肝心なのは大学を出た後 「継続は力なり」を大切にすること
		自主性	自主性が一番良い 言われてやるのではなく率先してやるのが大事
	仲間との関わり合い	最高の友達になる	良い汗かいたり良い涙ながしたりするのが最高の友達 高校サッカーにはまず理想がある 大人になっても友情を分かち合う
		味方とのコミュニケーション	コミュニケーションをとるためにしゃべることが必要 味方とコミュニケーションをとることが大事
		自分に自信を持ち、味方を叱咤激励する	仲よくすることがチームワークではない 自分に自信を持ち、味方を叱咤激励する 自分のことがちゃんとできなきゃ人のことは言えない リーダーシップも絶対必要 要求が高い人がいれば周りの人も頑張らなければならない

「人間教育」の大カテゴリーは、「社会で通用する選手の育成」、及び「仲間との関わり合い」の 2 つのカテゴリーから構成されている。

まず、「社会で通用する選手の育成」に関して指導者 B は、「全てがみんなサッカーのプロになれるわけでも何でもなしね。ですからそれが最終的に世の中に出てそういう部分が当たり前にできるようになれば、順応性もあるだろうし。」と述べ、選手が社会に出た時を考え、今のうちから世の中の厳しさを選手に伝えていることが明らかになった。また、

選手が社会に出た時に順応できるように、「相手に不快を与えない」ということや、「自主性」ということを選手に伝えていることが明らかになった。

次に、「仲間との関わり合い」に関して、指導者 B は、選手同士が大人になっても友情を分かち合えるような「最高の友達」になることを考え、指導にあたっていることが明らかになった。

また、指導者 B は、「継続は力なり」という言葉を用い、厳しい世の中においても、物事を投げださず、妥協せずに継続できる選手の育成に最も重点を置き指導していると述べていた。

このことから、指導者 B は、指導の中でも「人間教育」を最も重要視し、学生のうちに世の中の厳しさを教え、それに順応できるようにすることが重要であると考えていることが明らかとなった。

4) パフォーマンス向上

表 2 (D) 指導者 B 階層的カテゴリー「パフォーマンス向上」

パフォーマンス向上	パフォーマンス向上のための知識・理解	相手がいる中での技術	遠征で行った欧州の発想の下でのサッカー指導 南米でボールを失わない大切さを学ぶ キープの為にボール保持と点を取りに行くための積極的なボール保持 敵がいる中で技術を生かす 切り替えの早さを要求する
		戦術指導	ゲームの中での戦術への理解度が大切 サッカーにおいてバランスは絶対大事 最終的には戦術的なものを指導する チームプレーを行う上で戦術理解度が大事
		サッカーのための食事指導	サッカーをやるためのバランスのいい食事を大切にする けがの予防としての食事の大切さを伝える Jリーグができて食事に対する知識が身近になったのは良いこと 食事の指導は身近だが手を抜きがち

「パフォーマンス向上」の大カテゴリーは、「パフォーマンス向上のための知識・理解」のカテゴリーから構成されている。その中で指導者 B は、主に「技術」、「戦術」、「食事」に関して述べている。

まず、「技術」に関して指導者 B は、自身が選手時代に経験した欧州遠征から、敵がいる中でのボール保持の大切さを選手に伝えている。

次に、「戦術」に関して、指導者 B は、「やっぱりサッカーっていうのはバランスっていうのが絶対大事だと思いますしね。」と述べている。また、個々の勝手な動きによってそれを崩さないために、チームプレーを行う上でも戦術理解の必要性を述べている。

次に、「食事」に関して、指導者 B は、「J リーグできて、今日本代表なんかも当然食事的なものを、キャンプになるとね、管理してますしね。そういうことも非常にこう身近に、今の子供たちの身近な部分にありますし。」と述べた上で、「身近な部分でもありながら手を抜いてる所も結構あると思うのが事実なんでね。そこの辺のバランスってのは指導しています。」と述べている。

これらのことから、指導者 B は、選手個々やチームのパフォーマンスを高めるために、具体的な知識を提供し、それを理解させることを行っていることが明らかになった。

5) 指導者 B のコーチング・メンタルモデル

指導者B

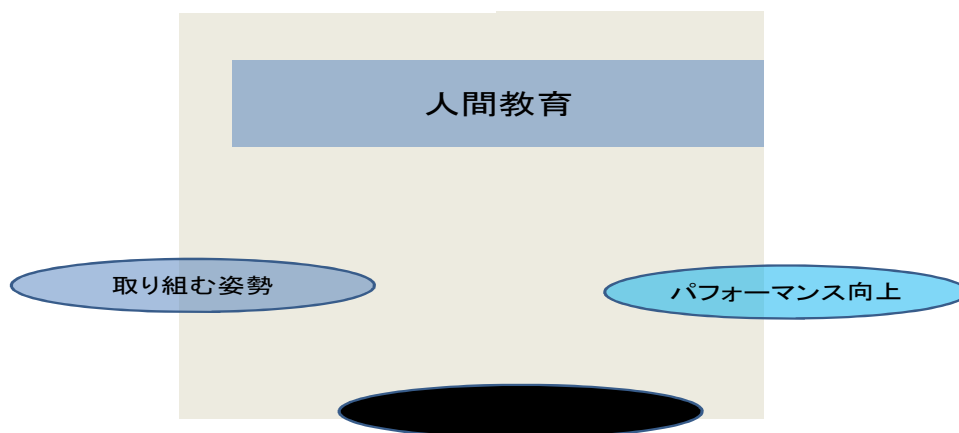


図 2 指導者 B コーチング・メンタルモデル

以上のことから、指導者 B は、サッカーを通して選手に「取り組む姿勢」を教えていることが明らかとなった。さらに、「楽しく面白い」サッカーから大人のサッカーへとパフォーマンスを高めるために、選手に必要な知識を与え、理解を促していることが明らかとなった。また、これらのことを伝える際に、指導者自身が妥協せずに伝える姿勢を持つことが大切であると考えていることが明らかとなった。そして最終的には、選手が社会に出た時を考え、厳しい社会においても順応できる選手の育成を目指していることが明らかとなった。

これらのことから、指導者 B のコーチング・メンタルモデルとして、図 2 に示したモデルが構築された。

3. 指導者 C

13 ページにわたるインタビュー・トランスクリプト・データから 75 の意味単位が得られ、7 つのカテゴリーに分類された。これらは最終的に「取り組む姿勢」、「選手支援」、「人間教育」、及び「周囲への貢献」の 4 つの大カテゴリーに分類された(表 3(A)-(D))。以下、指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーについて分析過程を詳述していく。

1) 取り組む姿勢

表 3 (A) 指導者 C 階層的カテゴリー「取り組む姿勢」

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	取り組む姿勢	手を抜かず全力で練習に取り組む	当然手を抜かないで全力で取り組むことを要求する 向上するため手を抜かないで全力で取り組む 手を抜かないで全力でやるのが競技力や体力の向上へとつながる 手を抜かないで全力でやることはどんなスポーツでも当たり前
		物事の取り組み方を重要視する	物事の考え方、取り組み方を教えることが結局はサッカーに生きてくる 試合で要求することと練習で要求すること、ベースは同じ取り組み方
		主体的に練習に取り組む	選手自らが積極的に主体的に取り組むことが大事 やらされた練習は身に付かない 意図や意味を考えてトレーニングしないと効果が出ない 考えながら行うことがサッカーでは大事
	選手に気付かせる環境作り	やらなきゃダメだと気付かせる	メンタルの部分で本人たちがしっかり取り組む しっかり取り組まざるを得ないような考え方を持つ状況を作る 自分たちがやらなきゃダメだという気持ちに持っていく 自分たちがやらなきゃダメだと気付ければ手を抜かない 選手が気づくまでやる、できるまでやるのが高校の部活動
		高いモチベーションを持てる雰囲気作り	高い意識を持たせる 大人数の中でのモチベーション、練習の雰囲気が一番大事 雰囲気作りやモチベーション作りを大切に モチベーションは人数が多いと目が行き届かなくなる 全員が高いモチベーションを持てるように工夫する 代ごとに選手と雰囲気が違う 高いモチベーションを持ち、伸びしろを自分で伸ばすことが大事 チームの状況を見て雰囲気を作ることが一番力を発揮できる
		やらせる練習の必要性	やらせ方気持ちの持っていき方はやってるうちに変わってきた 状況によってはやらせなきゃいけない
	内容があつての勝負	練習でのテーマを試合で発揮する	練習試合ではテーマを意識させる 時々によって要求するテーマを変える 公式戦では普段の成果を発揮することを求めるが、難しい 練習で要求していることがそのままゲームに繋がる 普段の練習で要求していることをゲームでそのまま発揮することを要求する
		内容を要求したうえでの勝ちを目指す姿勢	勝ち負けじゃなくて内容が大事な部分もある 内容を要求したうえでの勝ちを目指す姿勢

「取り組む姿勢」の大カテゴリーは、「取り組む姿勢」、「選手に気付かせる環境作り」、及び「内容があつての勝負」の 3 つのカテゴリーから構成されている。

まず、「取り組む姿勢」に関して指導者 C は、「基本的なことは、まあ

サッカーを教えるというよりかは、物事の考え方、取り組み方とかを教えている。それがまあ結局サッカーっていうスポーツに生きてくることだと思うんですよね。」と述べ、指導の中で物事の取り組み方を伝えることを大切にしていると述べている。具体的な姿勢としては、「手を抜かずに全力で」取り組む姿勢や、やらされている練習は身につかないという考えから、練習の意味や意図を考え「主体的に取り組む」姿勢などを選手に求めていることが明らかとなった。

次に、「選手に気付かせる環境作り」については、練習中の雰囲気を作ることによって高いモチベーションを持たせることが重要と述べていた。また、選手に「やらなきゃダメだ」と気付かせる環境作りの重要性も述べており、やらせる練習も時には必要であると考えていることが明らかとなった。

次に、「内容があつての勝負」について指導者 B は、「基本的には勝ち負けじゃなくて内容をつていうのが大事な部分もあると思うんですけどもね。」と述べ、まずは選手が練習の成果を試合で発揮することが重要であり、それがあつた上で勝利を目指すことが重要であると考えていることが明らかとなった。

これらのことから指導者 C は、サッカーを通じて、サッカーやその他の物事に「取り組む姿勢」を選手に伝えていることが明らかとなった。

2) 選手支援

表 3 (B) 指導者 C 階層のカテゴリー「選手支援」

選手支援	指導者の内省	多くを求めすぎない	最初は求めすぎだったが、求めすぎてもなかなかできない 最初から多くを求めてもできないので、目標から逆算して考える
		指導を深く考える	若いうちは深くまで考える余裕がなかった やっけるうちに考える余裕ができ、自分の指導に対する考えが深まった やっけるうちに指導に対する考えが深まってきた
	指導者の選手への接し方	指導者が選手と向き合う	人間性だけでなくサッカーのことも教えないと選手はついてこない 指導者が生徒・サッカーと向き合って子供たちと接すれば、子供たちは感じるものか 子供たちをこちらに向かせられないのは指導者の責任 自分自身も手を抜かず全力で指導する まずは選手を好きだと思う気持ち 自分の為ではなく選手のために指導する
		生活指導も選手との信頼関係	生活面の指導も指導者との信頼関係が大事 指導者の言うことを徹底することはサッカーだけでなく日常生活も同じ 日常生活で指導者の言うことができない選手は所詮そこまでの選手 ルールだからやるのでは意味がない

「選手支援」の大カテゴリーは、「指導者の内省」、及び「指導者の選手への接し方」の 2 つのカテゴリーから構成されている。

まず、「指導者の内省」に関して、指導者 C は、「徐々にやっぱそういうところの考えが深まってきたっていうか、そういうところだと思うんですね。」と述べ、経験を重ね、指導に対する考えが深まったことが、現在の指導哲学に影響を与えていると考えていることが明らかとなった。

次に、「指導者の選手への接し方」に関しては、指導者自身が選手やサッカーと正面から向き合い、選手の気持ちを指導者に向かせることが、指導を行う上で重要であると考えていることが明らかとなった。

これらのことから指導者 C は、指導者自身が選手、サッカーと向き合い、指導に対する考えを深めていくことが、選手を指導する上で重要であると考えていることが明らかとなった。

3) 人間教育

表 3 (C) 指導者 C 階層的カテゴリー「人間教育」

人間教育	サッカーを通じて人間性を高める	生活面がサッカーに繋がる	生活面ができない選手はサッカーもできない 最低限の生活面は体育人・スポーツマンにとって当たり前 やらなきゃいけないことをしっかりできない者はサッカーをやっても駄目 日常生活、社会のルールを守れない者はスポーツの中でルールを守って努力でき
		サッカーを通じて人間性を高める	サッカーを通じて人間性を高めることが全てだと思う 社会に出た時の物事の対応や考え方を指導する 将来生きていくのに必要な人間性、人間力をつけさせる 教育の一環、プロチームではないのでサッカーだけ教えるわけじゃない 選手が卒業してやってくためには人間性を高めることが必要 自分のできることはサッカーを通じて人間性を教えること 社会に出てからも必要な部分を教える 人間性を高めることはスポーツをやってく上で必要なことだと思う 諦めずに物事を最後まで一生懸命やり遂げることが大事 不撓不屈と一所懸命という言葉をよく使い、教える 不撓不屈と一所懸命をサッカーを通じて教える
		生活面をしっかりさせる	学校の生活が基本 最低限の生活面だけはちゃんとやる 全員が普段のことをまずしっかりやる 学校生活を充実させる 勉強も当然要求する クラブやりたいなら勉強もする

「人間教育」の大カテゴリーは、「サッカーを通じて人間性を高める」のカテゴリーから構成されている。

このカテゴリーに関して、指導者 C は、「一番はやっぱ高校生の成長の途中なので、サッカーを通じて人間性を高めるって言うのが全て。」と述べている。具体的には、「勉強もクラブやりたいんだったらちゃんとやりなよっていう、そういった指導」や、「当然しっかり授業の課題とか、態度であるとか生活面、その辺は当然ですけど、それができない選手は、当然サッカーも出来るわけがないので、その辺の話しはね、指導はずっとしているつもりですけどね。」と述べており、生活面がサッカーに繋がると考えていることが明らかとなった。また逆に、サッカーを通して物事の対応や考え方を教えることも大切にしていることが明らかとなった。

これらのことから、指導者 C は、生活面とサッカーを繋がるものと考え、それら両方を高めることで、最終的には選手の人間性を高めることが全てであると考えていることが明らかとなった。

4) 周囲への貢献

表 3 (D) 指導者 C 階層的カテゴリー「周囲への貢献」

周囲への貢献	周囲への貢献	応援され、愛される部活動	学校に貢献することで、周りから愛され、応援されるクラブになる しっかりやっていれば応援してくれることを子供たちに気付かせる 感謝してもらえる喜びや感謝の心、気持ちが大事 応援される経験が自信になる 人に何か良いことすれば、何か良いことがある 一生懸命やれば良いことがある、ということを感じさせる 愛される部活動ということに強く共感する
--------	--------	--------------	---

「周囲への貢献」の大カテゴリーは、「周囲への貢献」のカテゴリーから構成されている。

このカテゴリーに関して、指導者 C は、「応援され、愛される部活動」という言葉を用い、それを目指すことが大切だと考えていることが明らかとなった。その理由として、指導者 C は、周囲の人々に貢献することで、感謝され、応援されるようになり、そのことが選手の喜びや自信に繋がると考えていることが明らかとなった。

このことから指導者 C は、「周囲への貢献」ということを重要視しながら指導にあたっていることが明らかとなった。

5) 指導者 C のコーチング・メンタルモデル

指導者C

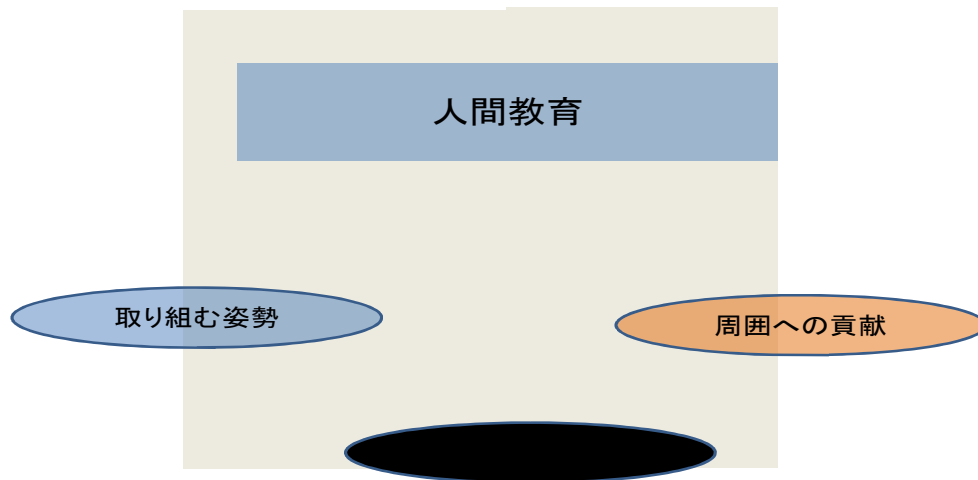


図 3 指導者 C コーチング・メンタルモデル

以上のことから、指導者 C は、選手の人間性を高めることが全てであると考え、その中でも「取り組む姿勢」や「周囲への貢献」を重要視して選手に指導していることが明らかとなった。また、これらのことを選手に伝える上で、指導者がどのように選手に接するかが重要であると考えていることが明らかとなった。このことから指導者 C のコーチング・メンタルモデルとして、図 3 に示すモデルが構築された。

4. 指導者 D

12 ページにわたるインタビュー・トランスクリプト・データから 77 の意味単位が得られ、4 つのカテゴリーに分類された。これらは最終的に「取り組む姿勢」、「人間教育」、及び「個の育成」の 3 つの大カテゴリーに分類された(表 4(A)・(C))。以下、指導者による発話データをたど

りながら各カテゴリーについて分析過程を詳述していく。

1) 取り組む姿勢

表 4 (A) 指導者 D 階層的カテゴリー「取り組む姿勢」

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	勝つことにこだわる	勝つことにこだわる	勝つことにこだわらせる どんなに無様でも勝つことにこだわらせる 勝った時の喜びを味わい、次のモチベーションにつなげる 勝つ為にやること=自分たちのサッカーを試合でやる 一番勝てると思っているからやろうとするサッカーがある 選手権予選にベストを持っていく やることをやらないでの負けに満足しない
		勝つために考える	強い相手に対して負けることもしょうがないと思ってほしくない どのようにしたら勝てるか考えてほしい 負けたら悔しがって欲しいし、直すために努力してほしい 失敗した時にどう改善して次のステップに上がるかが大事
	どういう気持ちで取り組むかが重要	積極性と冷静な判断	積極的なプレーを心掛ける ミスを怖がると積極性が出ない コンセプトをシュートを打たない言い訳にしまう 積極性がなかったら最初から選択肢は限定される 勝つ為には受け身ではなく攻めの姿勢を大事にする 積極性があるかつ冷静な判断が重要 積極性の欠如により選択肢は限られる、冷静な判断と積極性で選択肢は広がる
		トレーニングの成果を出す	トレーニングすることをピッチ上で表現する トレーニングの成果を出す=自分たちのやりたいサッカーをゲームで表現する
		足を動かす、声を出す	練習の最初の声だしと表情が重要 足を動かすことと声を出すことをかなり強く求めている 勝つ為には足を動かすことと声を出すことが必要 自分たちのサッカーをするためには走ることが重要 声を出す、足を動かす、苦勞をさせると言う当たり前のことをやる
		集中を持続する姿勢	集中を持続する姿勢 練習中はサッカーだけに集中する 練習への姿勢・集中・積極性・きつい時の良いプレーが指導の根底
		どういう気持ちで取り組むかが重要	上手くなるために練習にどういう気持ちで取り組むかが重要 気持ちを入れて日々の練習に取り組んでいけるような形作り 自分で限界を決めないで取り組む 上手くなりたい、強くなりたい気持ちが勝利に繋がるといい 結果に繋がってくると勝ちたいからやる 長い時間の努力が自信になる
		疲れた時、苦しい時にどう闘えるかが大事	きつい練習でメンタルと技術を獲得する 疲れた時、苦しい時に何が出来るかが大事 疲れた時にどう闘えるかが大事 試合終盤まで闘い抜く 厳しい練習をやることで、苦しいことへの嫌気がなくなった 我慢強くなり、プレーをやりきれようになった

「取り組む姿勢」の大カテゴリーは、「勝つことにこだわる」、及び「どういう気持ちで取り組むかが重要」の 2 つのカテゴリーから構成されている。

まず、「勝つことにこだわる」のカテゴリーについて、指導者 D は、「選手たちに対して勝つことにはこだわらせています。」と述べている。その中で指導者 D は、「どうゆう風にやってら勝てるかなとか、同じ年

代なんで。」と述べ、勝つことにこだわる姿勢とともに、勝つために考
える姿勢も選手に要求していることが明らかとなった。

次に、「どういう気持ちで取り組むかが重要」のカテゴリーについて
指導者 D は、プレーの積極性、トレーニングの成果を出すこと、足を動
かし声を出すこと、練習への集中、苦しい時の闘う姿勢を選手に要求し
ていることが明らかとなった。このような姿勢を指導するため、指導者
D は、練習の強度を上げ、故意に選手にとって厳しい環境を作っている
と述べていた。

これらのことから、指導者 D は、きつい練習によって取り組む姿勢が
育つという考えのもと、選手を勝ちにこだわらせ、敢えてきつい練習を
選手に課すことで、取り組む姿勢を育てていることが明らかとなった。

2) 人間教育

表 4 (B) 指導者 D 階層的カテゴリー「人間教育」

人間教育	私生活がサッカーに繋がる	私生活をしっかりさせる	根本的に基本的な生活をしっかりとすることが大事 私生活がしっかりした社会人を育てる きちんと生活してもらいたい 私生活から当たり前のことができないと社会で生きていけない 選手の意図まで観て指導する ペナルティーを課すことも大事
		私生活がサッカーに繋がる	私生活を大切にするのは、それがサッカーに繋がるし、普通のことだから 私生活とスポーツは繋がっている 私生活がだらしない子はサッカーやってもだらない 私生活とプレーは繋がる 私生活が練習やゲームに出る 私生活を正すのはサッカーにも繋がるので、やらせるところから指導する 私生活がしっかりできるチームほど強い 強いチームは私生活がしっかりしていて欲しい 強いチームは私生活がしっかりしていて欲しい
		私生活からスポーツマンらしくする	私生活からスポーツマンらしくしっかりする 私生活から献身的な姿勢を求める
		私生活とサッカーのバランス	プレーヤーの面も高校生の面もどちらも大切 サッカーの足かせにならないように学校生活をきちんとする 私生活とサッカーのバランスが難しい プレーヤーとして高校生として育成することが一番大事
		第一に高校生として育成する	プロサッカー選手ではないので、高校生として育成する プレーヤーである前に高校生であることが大事 高校生であることがあってのサッカー 第一に高校生として育成することがサッカーに繋がる
		自覚を持たせる	自分たちの代だという自覚が不十分 スタートが遅れると他の学校に追いつかない 看板を背負ってという意識を持って欲しい

「人間教育」の大カテゴリーは、「私生活がサッカーに繋がる」のカテゴリーから構成されている。

指導者 D は、私生活とサッカーを分けて考えておらず、私生活がサッカーに繋がると考えて指導している。そのため、まずは高校生として学校生活をしっかりさせることが重要であると考えていることが明らかとなった。しかし、生活面ができればサッカーのパフォーマンスが向上するとは考えておらず、選手として、高校生として育成することが大切であると考え、そのバランスに難しさを感じていることが明らかとなった。

このことから、指導者 D は、高校生として生活面をしっかりと指導しつつ、選手としてサッカーのことも指導することが大切であると考えていることが明らかになった。

3) 個の育成

表 4 (C) 指導者 D 階層的カテゴリー「個の育成」

個の育成	社会で通用する個の育成	チームの前に個人を育成する	チームとして勝つ前に個人が上手くなることが目標 個人の気持ちを作ることが勝つことに繋がる チームの勝利の為に個人の気持ちを作る 多くを求めず一つ一つ改善する 選手権で勝つ為に3年間でどこまで育成できるか
		プロの輩出が一つの目標	プロの輩出が一つの目標 勝つことと同時に選手の育成、プロの輩出が目標
		卒業後のステップアップを考える	選手が社会に出た時に通用するように指導するのは当たり前のこと 高校より先のカテゴリーでのステップアップを考え育成する

「個の育成」の大カテゴリーは、「社会で通用する個の育成」のカテゴリーから構成されている。このカテゴリーに関して、指導者 D は、インタビューの中で幾度となく「育成」という言葉を用い、高校よりも先のカテゴリーでステップアップできるように、個を育成することが大切であると述べていた。そのことは、サッカーにおいても生活面においても同様であり、選手としては、次のカテゴリーで通用する選手、最終的にはプロの輩出が一つの目標であると述べており、高校生としては、社

会で適応できるような社会人を育成することを考え、指導にあたっていると述べていた。

このことから、指導者 D は、チームとして試合に勝利することにも考えてはいるが、まずは、卒業後にステップアップできるように個を育成することが大切であると考えていることが明らかとなった。

4) 指導者 D のコーチング・メンタルモデル

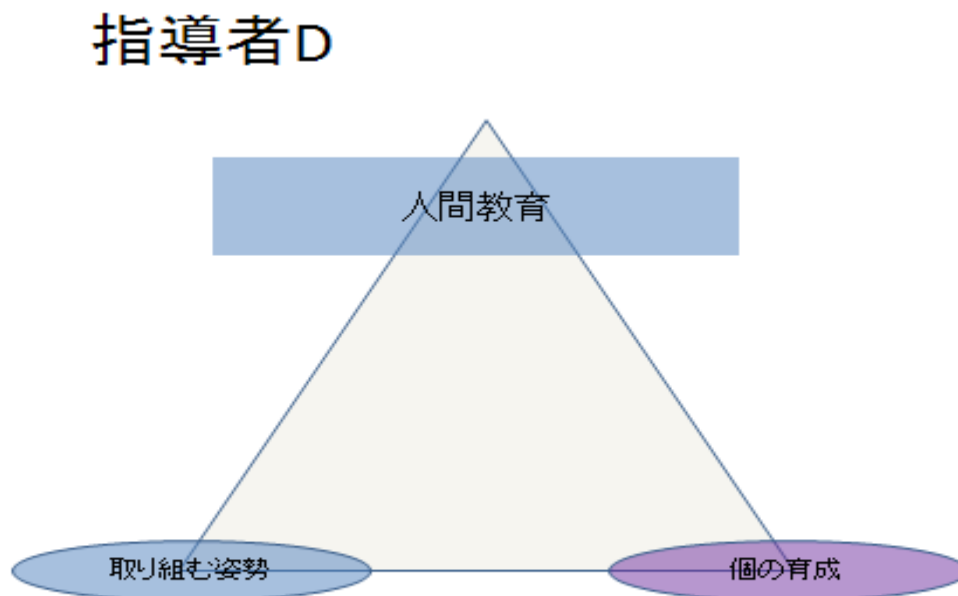


図 4 指導者 D コーチング・メンタルモデル

以上述べてきたことから、指導者 D のコーチング・メンタルモデルとして図 4 に示すモデル構築された。他の指導者とは異なり、指導者がどのように選手に接するか、という選手支援に関するカテゴリーがなかったため、三角錐のモデルにはならなかった。しかし、「取り組む姿勢」や「個の育成」を行う中で、最終的には社会で適応し活躍できる人間を育てることを考えていることが明らかとなったことから、図 4 に示すモデ

ルが構築された。

5. 指導者 E

22 ページにわたるインタビュー・トランスクリプト・データから 130 の意味単位が得られ、9 つのカテゴリーに分類された。これらは最終的に「取り組む姿勢」、「選手支援」、「人間教育」、及び「周囲への貢献」の 4 つの大カテゴリーに分類された(表 5(A)-(D))。以下、指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーについて分析過程を詳述していく。

1) 取り組む姿勢

表 5 (A) 指導者 E 階層的カテゴリー「取り組む姿勢」

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
取り組む姿勢	自分を高める姿勢	常に研ぎ澄まされた状態で自分を高める	常に集中した状態「be alert」にいる 常に研ぎ澄まされた状態で自分を見つめる 貪欲な気持ちで自分を高めることを常に言う
		明るく元気に、自分を鼓舞してプレーする	明るく元気にプレーすることが前提 常に明るく元気に、自分を鼓舞して練習に取り組む
	サッカーに対して情熱を持つ	サッカーに対して情熱を持つ	すごいと感じた選手はサッカーが好きな選手 すごいと感じた選手はサッカーに対して情熱がある 練習やサッカーに情熱がないと100回やって100回できる状態にはならない サッカーの魅力に取りつかれた男はサッカーから離れられない サッカーに対して情熱を持って取り組むことがサッカーの発展につながる
	自信が持てるまで準備する	ベストパフォーマンスのための良い準備	未来を変えるには過去を変えるしかない 大きな過去を変えない限り、豊かな未来はない いかに良い準備をするかを考える 短期的準備と長期的準備をする どんなにすごい選手でも試合ではミスが起きる 練習の時から100回やって100回成功しないと試合でのベストパフォーマンスは生まれ
		自信が原動力となる	常に向上させる気持ち、成功欲求を持つ 成功することが自信になり、喜びを味わえる 技術的には100回やって100回成功させる気持ち 監督や周りの仲間認められることが喜びになる 大人への脱皮に向けて自信を持つ 難しい試合を乗り切るには、最後まで自分を信じて諦めない気持ち 自分の突き進んでる道を全うできるか 自分のやってきたことを信じて立ち向かう 諦めない気持ちは自信以外の何物でもない 自分のやってきたことを信じて結果を出す 反撃の原動力はやってきたことに対する自信 反撃の原動力はやってきたことに対する自信
	勝ちにこだわる	どんなゲームでも勝つことを目指す	常に勝つことを考えさせる 負けていいゲームは選手にはない 負けていいゲームは選手にはない 選手はどんな状況、どんな相手でも立ち向かわなければいけない どんなゲームでも勝つことを目指す 汚い手を使ってでも勝つということは言わない 自分でエクスキューズすると本当に良いプレーは出てこない 自分の持っている力で最大限の努力をして勝つことに全精力を傾けると表現する 負けてはいけないという気持ちが自分を高める 負けてはいけないという気持ちを背負う 負けてはいけないという自負を持つ 負けちゃいけないという意識がないと本当に強くないし、上にも行けない 勝つことを目指す上でのゲームをどう進めるかについての戦術的な指導

「取り組む姿勢」の大カテゴリーは、「自分を高める姿勢」、「サッカーに対して情熱を持つ」、「自信が持てるまで準備する」、及び「勝ちにこだわる」の4つのカテゴリーから構成されている。

まず、「自分を高める姿勢」に関して指導者 E は、常に集中した状態、研ぎ澄まされた状態で自分自身を見つめることを選手に要求している。さらに、明るく元気に自分を鼓舞しながら高めていく姿勢を選手に求めていることから、選手が自分で自分の精神をコントロールし、高める姿勢を求めていることが明らかとなった。

次に、「サッカーに対して情熱を持つ」に関して、指導者 E は、自身が選手時代に接した選手を例に出し、「100回やって100回できるっていうのが、やっぱり練習に対する情熱だとかサッカーに対する情熱だとか、そういうものがない限り絶対に続かないですし。」と述べている。指導者 E は、練習中に100回やって100回成功するくらいの技術でないと、試合で生かせないという考えを持ち、選手に「自信が持てるまで準備する」ことを求めている。その準備を行う上で、サッカーへの情熱がなければ続かないと考え、サッカーに対して情熱を持ち練習に励む姿勢を選手に求めていることが明らかとなった。

次に、「勝ちにこだわる」について、指導者 E は、負けても良いと選手が考えてしまうと、その選手が自分で力を制限してしまうと述べている。それゆえ、勝ちにこだわらせることで、選手に最大限の力を発揮し、努力する姿勢を求めていることが明らかとなった。

これらのことから、指導者 E は、練習、試合など主にサッカーの場面を通じて選手たちに取り組む姿勢の重要性を伝えていることが明らかとなった。

2) 選手支援

表 5 (B) 指導者 E 階層的カテゴリー「選手支援」

選手支援	指導者の役割	良いプレーを褒め、ダメなプレーを否定する	良いプレーは見逃さず声をかけることがコンセプト 良いものは褒め、ダメなものは徹底的に否定する 選手の不足している部分は徹底的に追求する 周りのスタッフとの連携も大切
		選手がいたという証を作る	学校にその選手がいたという証を残す 高校生活での証、生きてきた証を作ってあげられるのが監督、コーチ
		後々になって分かればそれでいい	自分の背中を見て評価してくれるのが一番うれしい 後々になって分かってくればそれでいい 若い時には気づかなくても、いつか必ず気づく 今言わなければならない言葉は、引かずに攻めて言う
	指導への影響	指導の変化がベスト8までを楽にした	挫折を味わうことで指導者が変わった 指導者が変わることによって8までの道は苦勞しなくなった 監督力と選手との相性次第でベスト8までは行ける
		優秀な人材を見れたことが現在の指導に影響している	高校時代、優秀な人材を見れたことが現在の指導に影響している 自分が携わった選手を例に出し、選手に要求する 自分がすごいと感じた選手を常に基準にして選手に求める 技術とセンスと発想がマッチして楽しいサッカーになる
	伝え方の工夫	ベスト8から4へは壁がある	8から4になるには指導者・選手ともに壁がある 観たことのない世界はイメージしにくい 観たことのない世界はイメージしにくい
		環境面が厳しい中での工夫	休む時間を減らし、いかに集中を持続させるか 物理的な環境面が厳しい中で工夫を心がける
		今の子を指導することへの難しさ	今の子は気持ちのスイッチが入らない 頑張らなくても満たされてしまう 今の子は他人にも自分にも優しい 選手にピリピリ感がない 古き良き時代の礼儀が欠如している 基本的なマナーの欠如 今の子は現在でしか勝負できてない ここ数年の子は緊迫感に欠けているのが最初に目につく

「選手支援」の大カテゴリーは、「指導者の役割」、「指導への影響」、及び「伝え方の工夫」の3つのカテゴリーから構成されている。

「指導者の役割」に関して、指導者 E は、選手に対して善悪をはっきりと示すことを述べている。指導者 E は、「良いプレーを褒め、ダメなプレーを否定する」ことや、選手の悪いところや直さなければならないところに関して引かずに攻めて言うことなどを述べ、それを通じて、その選手が指導している学校、チームにいたという証を作っているのが指導者の役割であると捉えていることが明らかとなった。

次に、「指導への影響」について指導者 E は、自身が観てきた選手の影響や、指導者ライセンス講習会を通じて自分の指導が変化したことが、今の指導を形作っており、指導が変わったことでベスト 8 までの道のりが楽になったと述べている。

次に、「伝え方の工夫」について、指導者 E は、観たことのないレベルをイメージさせる難しさ、環境面での難しさ、現在の子どもを指導する難しさなどについて述べている。これらの難しさを解消するために、指導者 E は、指導者自身が伝え方を工夫することが重要であると考えていることが明らかとなった。

これらのことから、指導者 E は、指導者自身の姿勢を述べ、指導者が選手にどのように接するかが重要であると考えていることが明らかとなった。

3) 人間教育

表 5 (C) 指導者 E 階層的カテゴリー「人間教育」

人間教育	サッカーを通じた人間教育	言い訳せずに勉強することがサッカーに繋がる	言い訳せずに勉強もする 強かった時のチームは成績優秀者が多い 勉強をやる子は言い訳をしない 常に好成績を収める子は絶対自分に言い訳しない
		サッカーを通じて人間として一流になることを要求する	サッカーだけでなく人間としての魅力を持たなければ評価されない 人間もサッカーも素晴らしいという評価がサッカー選手にとって一番大切 仲間からも尊敬されるような行動をとる サッカーしかできないという評価が一番嫌 紳士的な行動を取れるような人間がいなければ評価されない サッカーの選手はカッコいいという評価が嬉しい 見た目だけでなく行動や発言でカッコいいという評価が嬉しい 人間としても一流になることを要求する 「サッカーしかできない」という評価が一番嫌 サッカーだけでなく人間として一流でなくてはならない サッカーで学んだことは社会でも生きる 人間として一流になることは他人から評価される人物になること
		自分に対する怒りが変化のポイントになる	人間の原動力になるのは怒り 怒りのない人間は自分の持っている力を出せない 反骨精神や怒りがないと人間は向上しない 大学時代の挫折が怒り・反骨精神の原点 大学時代の指導者の言葉が怒り・反骨精神の原点 自分に対する怒りが変化のポイントになる 自分に対する怒りがないと人間は弱く、動けない 人間の本質的な眠ってる気持ちを押さえ付けてしまっは良くない ホントの怒りが爆発的なパワーを生む
		私生活がいい加減なものには罰を課す	私生活がいい加減なものには罰を課す 私生活がいい加減なものには罰を課す 罰を課す、課さないでそんなに違いはない ペナルティーなしでできるのが理想
		時間を守ることの重要性	時間を守ることが人間の生活の中で一番大事 時間を守るとは人間にとって一番大事 時間の重要性に気付いていない子が結構いる スポーツにとって時間を守ることは何より大事

「人間教育」の大カテゴリーは、「サッカーを通じた人間教育」のカテゴリーから構成されている。このカテゴリーにおいて指導者 E は、サッカーだけでなく人間としても一流になることが大切であると述べてい

る．また，「サッカーで学んだことは社会でも生きる」と考え，サッカーを通じた人間教育ということに指導の重きを置いていることが明らかとなった．さらに指導者 E は，人間性が良くなる変化のポイントとして，自分への怒りを挙げている．指導者 E は，怒りが爆発的なパワーを生むと捉え，自分に対する怒りがない選手は，自分を変えるパワーがないことを述べている．このことから，指導者 E は，サッカーを通じて選手の人間性を高めることが重要であると考えており，その変化のポイントとなるのが自分に対する怒りであると捉えていることが明らかとなった．

4) 周囲への貢献

表 5 (D) 指導者 E 階層的カテゴリー「周囲への貢献」

周囲への貢献	周囲への貢献	感謝の気持ちを持つ	優等生を目指させる 感謝の気持ちを絶対に持つ 学校にも感謝の気持ちを絶対に持つ サッカー部＝学校の顔という意識を持って生活する 社会やサッカーに恩返し・貢献できるような人生を考える 現在サッカーに携われるのは今までお世話になった指導者のおかげ 良い人生を送れているという意味ではサッカーが全て 良い人生を送らせてくれたサッカーに対して恩返しする サッカーに感謝しなければいけない 楽しい人生を送らせてもらったサッカーに恩返しすることを考える 色々なものから恩恵を被り、その恩恵に対して恩返し出来るのが人間
		観てる人に憧れを与えるサッカー	見てる人が憧れるプレーをする 高校生は小中学生の見本になる 小中学生の憧れとなるようなプレーを考える 試合中の態度も憧れに繋がる 握手する姿、相手に対する敬意、試合の中でのマナーを意識する 周りの人に素晴らしいと思われるようなプレーをする 自分が憧れたことが指導の原点にある 自分が憧れたことが指導の原点にある 高校生でも大人を喜ばせ、年下の子の憧れにもなる 技術だけでなく取り組む姿勢も含めて見てる人に喜びを与える 高校生でも見てる人に憧れを与え、サッカーの普及もできる 自分の楽しみだけでサッカーをやってもうまくなれない サッカーを通じて喜びを与えられる人間になれば意味がない
		サッカーの文化的役割	スポーツ＝文化、人間の活動の中でなくてはならないもの 文化活動の中で人にメッセージを伝える役割もサッカーにはある

「周囲への貢献」の大カテゴリーは，「周囲への貢献」のカテゴリーから構成されている．このカテゴリーの中で指導者 E は，選手たちに対し，自分たちを支えてくれる周囲へ感謝の気持ちを持ち，サッカーを通じて周囲に恩返しすることが大切であると述べている．具体的には，観てる人に憧れや喜びを与えられることが重要であると考え，サッカーにはそ

ういったメッセージを伝える役割があると考えていることが明らかとなった。

5) 指導者 E のコーチング・メンタルモデル

指導者E

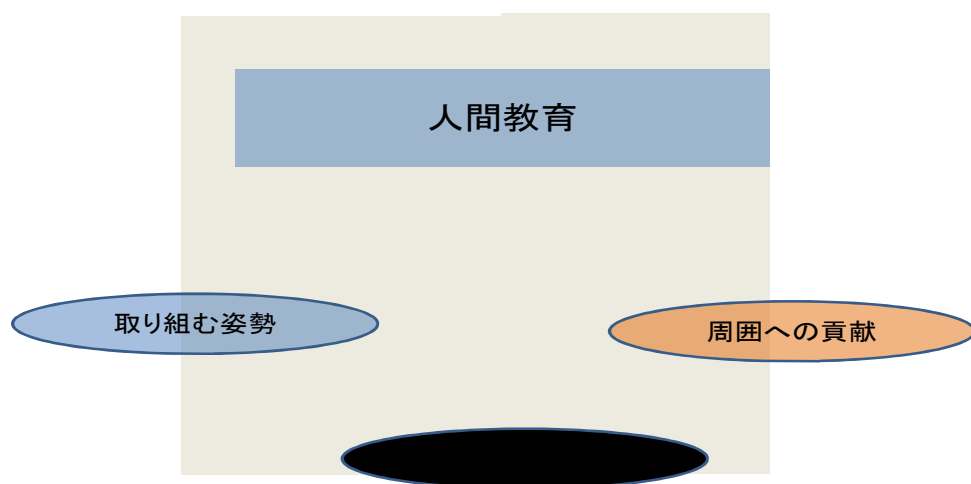


図 5 指導者 E コーチング・メンタルモデル

以上述べてきたことから，指導者 E のコーチング・メンタルモデルとして，図 5 に示すモデルが構築された．指導者 E は，サッカーを通じて「取り組む姿勢」や「周囲への貢献」について選手に伝えながら，最終的に選手を人間として一流に育てることを考えながら指導にあたっていることが明らかとなった．また，その上で，指導者自身がどのように選手に接していくかが重要であると考えていることが明らかとなった．このことから，図 5 に示すモデルが構築された．

6. 指導者 F

24 ページにわたるインタビュー・トランスクリプト・データから 141 の意味単位が得られ，8 つのカテゴリーに分類された．これらは最終的に「選手支援」，「人間教育」，「パフォーマンス向上」，「勝ちにこだわる」，及び「我慢を学ぶ」の 5 つの大カテゴリーに分類された(表 6(A)-(E))．以下，指導者による発話データをたどりながら各カテゴリーについて分析過程を詳述していく．

1) 選手支援

表 6 (A) 指導者 F 階層的カテゴリー「選手支援」

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	標題
選手支援	選手との距離を近くする	選手との距離を近くする	監督になった自覚が指導を変えた 選手の中に入って伝える できるだけ子どもたちの近くにいる 近くでプレーを見る 距離を近くして話す 近くにいることで選手のその日の調子分かる まずは自分が見本になる 選手とい時間長くし、いろいろなことを話す 最後の一人が上がるまでグラウンドにいる 選手を近くで見て判断する 黙って待つことも大切 個々の感情・雰囲気を感じるために近くに入る

「選手支援」の大カテゴリーは，「選手との距離を近くする」のカテゴリー一から構成されている．このカテゴリーの中で，指導者 F は，「近くで例えば話をするときも，説明をしたり，ミーティングをするときも，できるだけ距離を近くしてしゃべるんですよ．」と述べ，物理的に距離を近くして選手と接していると述べていた．また，「生徒とできるだけ色々なことを話すっていう，一緒にいる時間を長くするとか，そういうことですよね．」と述べ，物理的にだけでなく，心理的にも選手との距離を近くすることが重要であると述べていた．このことから，指導者 F は，選手との接し方において，物理的，心理的距離を近くして伝えることが重要であると考えていることが明らかとなった．

2) 人間教育

表 6 (B) 指導者 F 階層的カテゴリー「人間教育」

人間教育	チームを結束させる	チームを結束させる	チームを一枚岩にするために考える チームスポーツの良いところは一つに結束すること 集団スポーツは結束しなければ意味がない
		応援される選手を育てる	選んだ選手が応援される子であればいい 心から応援されるにはグラウンド以外が大切 応援されるにはズルをしないこと 応援される人間性であればいい 応援する側にも葛藤や我慢がある 応援されない選手は試合に出てはダメ 最後は自分で気づく ズルをしている選手がどのくらい大人になれるか サッカーの評価は数字に出ない 誰が出るかは監督の主観 監督の主観が全員納得するものとは限らない 出れない選手を納得させるために考える
	人間性がサッカーに繋がる	人間性が良くなないとチームが強くない	選手の人間形成、人間性が良くなるかどうか 人間性が良くなないとチームが強くない 技術を扱うのは人間 人間性が高まらないと技術を発揮できない 武器とそれを使う心が大事
	自覚を持たせる	自覚を持たせる	自覚を持たせる クラブ生の代表格としての自覚を持たせる 学校ではサッカー部として見られる
		自分たちのことに責任を持つ	物の管理をしっかりさせる 用具は大切に扱うようにさせる 練習をやらない日はグラウンド周りを掃除する 自分たちのことに責任を持つ 使うものを事前に準備しておく
		勉強を疎かにしない	学生の本分は勉強 部活に迷惑をかけない為にも勉強する

「人間教育」の大カテゴリーは、「チームを結束させる」、「人間性がサッカーに繋がる」、及び「自覚を持たせる」の 3 つのカテゴリーから構成されている。

このカテゴリーの中で指導者 F は、「僕は学校の部活動なので、人間形成だと思うんですよ。人間性が良くなるかどうかだと思うんですよ。」と述べ、「僕は人間性が良くなないとチームが強くないと思ってますから。」と述べている。これについて指導者 F は、選手起用の例を挙げ、どの選手を試合で使うかは監督の主観であるが、その主観を全て選手に伝えるのは難しいと述べている。それゆえ、誰が試合に出ても、出ない選手が納得するように、選手には応援される選手になることを要求している。そのために選手には、生活面を含め、自覚を持って行動することを要求している。そのことを通じて、結果的にチームとしての結

束を高め、チームパフォーマンスが高まる、それゆえ、人間性がサッカーに繋がると考えていることが明らかとなった。

このことから指導者 F は、選手の人間性を高めることに指導の重点を置き、指導にあたっていることが明らかとなった。

3) パフォーマンス向上

表 6 (C) 指導者 F 階層的カテゴリー「パフォーマンス向上」

パフォーマンス向上	運動量とスピードが基本	サッカーの基本は走ること	走りながらやるスポーツなので走れないと話にならない 運動量があった上で技術を生かすのが現在のサッカーの主流 走れた上で長所を生かすのは良い 練習の中で運動量と連続性を常に言う 基本的に走れることが一番 動きっぱなしの中で何ができるか サッカーの基本は走ること 得意分野を生かすためのペースが走り うまいことを選手に求めたがうまくいかず、走りをペースに変えた
		ブレースピードを上げる	技術的な部分ではタッチ数を減らす 走りをペースとしてスピード、速さを追求する 走る速さは全員が持っているわけではない 走る速さを持っていない者はブレースピードを上げる 走るのが遅くても運動量と連続性があれば適用する 足が遅くてもダイレクト、判断の速さを要求する パワー・フィジカルは個々によって違うが、速さは誰でも正せる
		運動量とスピードが一番伝える部分	多くを求めずに運動量とスピードだけ求める 運動量とスピードをベースにしたうえで細かい部分を指導 運動量とスピードが一番伝える部分 走ることとスピードをベースにしたうえで長所に合った戦い方 戦い方を考えた結果としての運動量とスピード
	長所を伸ばせる環境作り	今持っているものを伸ばすことで戦力になる	高校年代から基礎技術をつけるのは時間がかかるし難しい 基礎技術は高校年代より下の代で身につけるもの 基礎技術を高校年代からつけるのは大変 今持っているものを伸ばすことで戦力になる 苦手なことを改善・克服するのはゲームに絡んでから
		毎年選手が変わるのが高校サッカーのデメリット	毎年選手が変わるのが高校サッカーのデメリット いい選手を持ってても卒業したら使えない 持っている選手が変わるのでストロングポイントも変わる
		モチベーションを高める環境作り	次の代の戦力が育たないことは強化として良くない 気を抜いたら落とされることで毎日頑張る

「パフォーマンス向上」の大カテゴリーは、「運動量とスピード」、及び「長所を伸ばせる環境作り」の 2 つのカテゴリーから構成されている。

まず、「運動量とスピード」に関して指導者 F は、サッカーの基本は走ることであると考え、走りながら技術や長所などを生かすことを選手に要求していることが明らかとなった。また、走りを追求した上で、判断の速さやダイレクトタッチなどを挙げ、スピードのあるプレーを選

手に要求していることが明らかとなった。これについて指導者 F は、「パワー、フィジカルっていうのは、やっぱり個々によって違うので、速さっていうのは考え方次第で誰でも正させられると思うんですよ。」と述べ、毎年選手が入れ替わる高校サッカーという環境において、運動量とプレースピードを高めることが重要であると考えていることが明らかとなった。

次に、「長所を伸ばせる環境作り」について、指導者 F は、毎年選手が入れ替わることを「高校サッカーの一番のメリット、デメリットなのかもしれない。」と述べている。その上で、指導者 F は、選手の技術について触れ、「持っているものを伸ばす方向に持っていった方が戦力になると思う。」と述べている。このことから指導者 F は、新たに技術を身につけるのではなく、今持っている技術や長所を伸ばすことが重要であると考えていることが明らかとなった。

これらのことから、指導者 F は、「運動量とスピード」や「長所を伸ばせる環境作り」を行うことで、サッカーのパフォーマンスを高めていることが明らかとなった。

4) 勝ちにこだわる

表 6 (D) 指導者 F 階層的カテゴリー「勝ちにこだわる」

勝ちにこだわる	勝ちにこだわる	勝つことを要求する	コーチ時代は勝敗より育成を考えた 監督になってからは勝負だけ 勝負、とにかく勝ち負け 勝つことを要求する 勝つことを要求。勝てばいい。 監督は勝つこと以外に内容も求める 勝ちを目指す中でプロセスをどう作るか指示する 選手らは勝つことを考えれば良い 勝ち以外を求めると勝ちに対して甘くなる 勝ち負けだけを求める分、負けたら罰を与える ゲームは勝ち負けだけを考える 公式戦は勝って次のステージに進むことだけが目的 良い内容のゲームをしても負けたら意味がない 勝つためにプレーを判断する 「ドリブルがしたい」は判断じゃない 勝つために何が必要か判断する 同じプレーでもチームが勝つための判断とそうでない判断は全然違う 勝てば内容を修正するチャンスが残る
---------	---------	-----------	--

「勝ちにこだわる」の大カテゴリーは、「勝ちにこだわる」のカテゴリーから構成されている。このカテゴリーの中で、指導者 F は、「勝負なんで、子供たちに要求するのは勝つことだけです。練習試合から、公式戦は当たり前ですけど、練習試合も勝つことだけ。勝てばいい。」と述べている。他の指導者が、勝つことにこだわる中で、取り組む姿勢について述べていたのに対し、指導者 F は取り組む姿勢については触れず、「内容が悪くても勝つ。悪くても勝てば次残るし、次残ればその悪い内容は修正するチャンスがある。でも負けたりしないですから。」と述べ、勝つことが選手を育てると考えていることが明らかとなった。そのため指導者 F は、「勝つこと以外の部分を子供たちが考え始めたら、やっぱそこが甘くなると思うので、子供らにはもう勝つことだけ。」と述べ、勝つことだけを選手に要求することが重要であると考えていることが明らかとなった。

5) 我慢を学ぶ

表 6 (E) 指導者 F 階層的カテゴリー「我慢を学ぶ」

我慢を学ぶ	サッカーを通して我慢を学ぶ	サッカーを通して我慢を学ぶ	大人になるためには我慢を覚える 子どもと大人の差は我慢できるかどうか 子供は我慢が出来ないからズルをする 我慢が出来ない子はダメ 我慢することが大人になること 大人になって我慢が出来ないと社会、組織から弾かれる 大人になることは我慢を覚えること サッカーを通して我慢を学ぶ すぐに自分の感情をダイレクトに出すと上手くいかない サッカーを通じて我慢を身につければ良い 最後は自分が判断しなければならない サッカーは子供を大人にし、大人を紳士にする 人間の成長があるからサッカーは世界でやられている チームが勝つ為に我慢して自分の役割に徹する サッカーには我慢が含まれている サッカーは子供たちが我慢を覚えていきやすい教材
		ルールを守る	一番は規律をしっかりする とにかくルールを守る ルールや制限を与えるのは、そのことによって良くなるから ただやるだけで良くなるならフリーでいい ルールを守らないと崩壊する 集団の心理として、守らない奴がいたらそいつだけにはならない 絶対誤魔化さないでルールを守る ルールを守りながらどうやるかという発想が成長へつながる ルールを守れなかったら罰を与える ルールを守れなかったら罰を与える ルールを守ることグラウンド内ではある程度きちっとするようになった ルールを守る、特に校則は絶対に守る
		ズルしない、誤魔化さない	「ズルをするな」と言う 自己申告した時は注意で終わらす 逃げ・誤魔化しは厳重に指導する ズルは必ず誰かに見られてる ズルしてるやつが出ると出てないやつが寂然としない気持ちになる 出てるやつを心から応援できる体制を目指す 出てるやつを心から応援できる体制に近づくためにズルをしない 試合に出る選手がズルをするのは絶対だめ ズルをさせない。ルールを守らせる。 ズルをさせない。ルールを守らせる。 ズルをさせない ズルをさせない。怒られなければいいのではなく誤魔化さない。 誤魔化すことに対して怒る ズル・誤魔化しに対してはすぐ怒る バネなやついいだろうという雰囲気に対しても怒る ズルをして自己申告しない者には厳重に指導する 一番大事なのはズルをしないこと ズルしない、誤魔化さないことが一番根本にある 一番根本にしていることが守れない者は練習に参加させない ズルをしないことが基のサッカー部のルール ズルをしないように自己申告させる 人を見て態度を変えることは人間として汚いと伝える

「我慢を学ぶ」の大カテゴリーは、「サッカーを通して我慢を学ぶ」のカテゴリーから構成されている。このカテゴリーの中で指導者 F は、子どもが大人になるためには我慢を覚えることが必要であると述べている。そのため、学校生活や練習、試合の中で、選手たちにルールを守ることや、ズル、誤魔化しをしないことを徹底させている。また、指導者 F は、「その中で我慢してでも、俺は試合出たいけど、でも我慢してでもあいつら応援するんだって言うことがあるから、そういうことを出すか

らみんなが、周りのやつも頑張ろうって気になるし、だからそういったことが、やっぱりすごくサッカーには含まれてるんじゃないですかね。」と述べ、サッカーには我慢が含まれていると捉えている。また、指導者 F は、サッカーについて「だからそういうことを子どもたちが分かっくいける、いきやすい教材ではあるんでしょうね、とは思いますが、サッカーっていうのは。」と述べ、サッカーを選手たちが我慢を学ぶ教材として捉えていることが明らかとなった。

このことから、指導者 F は、サッカーを通して我慢を学ぶことを重要視し、指導にあたっていることが明らかとなった。

6) 指導者 F のコーチング・メンタルモデル

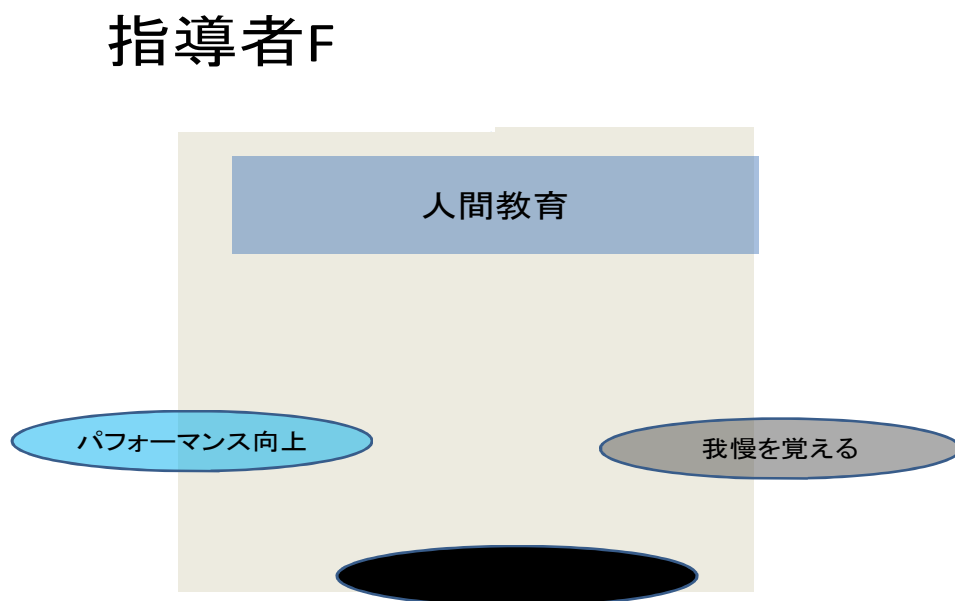


図 6 指導者 F コーチング・メンタルモデル

以上述べたことから、指導者 F のコーチング・メンタルモデルとして、図 6 に示すモデルが構築された。指導者 F は、勝つことやパフォーマンス

スを高めること，我慢を覚えることを重要視し，最終的に選手の人間性を高めることに最も重視していることが明らかとなった．また，その上で，選手との物理的，心理的距離を近くして指導することが重要であると考えていることが明らかとなった．このことから，図 6 に示したモデルが構築された．

IV. 考察

1. 共通性

結果から 6 人の指導者のコーチング・メンタルモデルが構築された．本研究では，指導者の特異性の観点から分析を行ったが，共通する部分も見られた．ここでは，指導者に共通して見られた部分について考察を進めることとする．

1) 人間教育

本研究において 6 人の指導者全てに共通している部分として「人間教育」の大カテゴリーが挙げられる．人間教育について黒田（2008）は，「高校世代にとって必要なのは，人間教育である．これからの人生を生きていくための基礎を固める大切な時期なのだ．人としての基本を身に付けさせないで，どうして選手が育つというのか．」と述べ，高校サッカーにおける「人間教育」の重要性を述べている．さらに古沼（2006）は，「『生きるということの基本姿勢を守る』ことがチームスポーツであるサッカーにも大いに繋がっていますから」と述べている．また，斎藤（2007）は，「心・技・体はそれぞれに重要だけれど，一番重要なのは『心』だということを説いたのです．」と述べた上で，次のように述べている．

「『いい高校生がいいサッカー選手になる』ということも言いまし

た．いい高校生というのは何か、言わなくても分かることです．『動物を教えるのなら鞭でたたくけど、お前たちは自分で考えられるはずだ』と諭しました．自らを律しなければ人間として成長することはできません．特にサッカーの選手は常に自分で考えてプレーしなければならないのですから、そういう教えが必要だと考えました（斎藤，2007）．」

このことから、多くの指導者が、「人間教育」の重要性を認知し、指導にあたっている可能性が示唆された．また、多くの指導者が、サッカーと人間性の関係について、双方を分けて考えておらず、双方が繋がるものと考えている可能性が示唆された．

しかし、人間性を高める中で大切にしていることには違いが見られた．本研究において、指導者 A は「行動を起こす」ということを、指導者 C、E は「周囲への貢献」を、指導者 F は「我慢を覚える」ことを挙げていた．何が良いかは一概に言えないが、先述の古沼（2006）は、チームとしての「集団性」を、斎藤（2007）は選手が自分で考えてプレーと言った「自律」を重要視していた．このことについて山本（2006）は、「教育はあくまでもサッカーの一部分であり、サッカーは教育よりも大きなものだということを忘れてはいけない．」と述べている．また、本研究の指導者 F は、「ドイツ人のコーチの人が、サッカーは子供を大人にする、大人を紳士にするっていう有名な言葉を残したと思うんですけど、僕はそれはもうまさしくそれだと思うんですよ．」と述べている．さらに指導者 F は、「このスポーツをやることによって、人間が成長していく．人間が成長していくっていうことが、そういうのがすごく含まれてるから．」と述べた上で、「だから僕は世界中で一番競技人口が多いスポーツなんだと思うんですよ．」と述べている．このことから、多くの指導者

は、サッカーは様々な教育的側面を持っていると考えていることが分かる。また、北村ら（2005）は、心的支援について、「この心的支援が重要な理由の一つは、指導の対象がプロ選手とは異なり育成の過程にある高校生選手である点にある。」と述べている。そのため、多くの高校サッカー指導者は、選手の「人間教育」を最も重要視し、選手の人間性を育てるために、サッカーの教育的側面を重要視している可能性が示唆された。

2) 取り組む姿勢

「取り組む姿勢」の大カテゴリーは、6人の対象者全員に共通していたわけではないが、指導者Fを除く全ての指導者に共通していた。

「取り組む姿勢」の大カテゴリーも、「人間教育」の大カテゴリーと同様に、多くの指導者がサッカーに取り組む姿勢や、サッカーでの取り組む姿勢について述べ、サッカーと取り組む姿勢を切り離して考えてはいなかった。

サッカーに取り組む姿勢に関して柴田（2008）は、「そういう子がいる半面、タレントを持っているのに長続きしない子も多い。つまり、取り組む姿勢が中途半端なんですね。」と述べており、いくら良い技術や才能を持っていても、取り組む姿勢が中途半端であれば、選手として長続きしないと述べている。また、山本（2006）は、「教育というのはサッカーの一部分だ、と言ったが、サッカーが持つ教育の側面とはこういう部分だ。おそらく選手たちには、『教えられている』とか『教育を受けている』という意識はないだろう。ただ自分の好きなサッカーを一生懸命やることで、自らを表現する方法を学び取っていく。」と述べている。このことから、多くの指導者は、サッカーの持つ教育的側面を把握し、選

手をサッカーに向かわせることによって、選手が教育的な側面に無意識的に触れ、自ら様々なことを学び取っていくということを把握しているからこそ、サッカーに取り組む姿勢を重要視している可能性が示唆された。

3) 選手支援

「選手支援」の大カテゴリーも、「取り組む姿勢」の大カテゴリーと同様に、指導者 D を除く全ての指導者に共通していた。

「選手支援」の大カテゴリーは、指導者がどのように選手に接するかに関して述べられた大カテゴリーであり、その内容は主に、信頼関係を築くことと、伝え方を考えることについて述べられたものであった。

大槻（2008）は、選手との信頼関係作りについて、「あと、『グラウンドを離れたら、俺はおまえらと同じひとりの人間。だから普通に話すよ。でも、グラウンドの中では俺の言うことを聞いてくれ』ということは徹底しています。」と述べている。また、本田（2009）は、「今は理論づくりの指導が中心になりましたが、ただ話して聞かせているだけではわからない場合が多い。だからこそ、挨拶や掃除、礼儀作法など地道なことから積み重ねて大人と話す機会を多く作らないといけない。自立心を養っていくことが指導者の大きな使命だと私は考えます。」と述べている。このことから、まず指導者は選手と話せる環境を作ることが重要であると言える。これについて松田（2003）は、「わたしの持論のひとつが、指導論は恋愛論と人生論に通じるというものである。恋愛は男と女が、指導は先達が後輩を、人間が人間を『好きになる』ことからすべてが始まる。」と述べている。また、本研究の指導者 C は、「やっぱり子供が好きって言うか、まずそこかなって思いますけどね。」と述べた上で、「自分

の為についていう，たまにね自分の為にやっちゃうっていうか，自分を守っちゃうっていうか，そうじゃなくてやっぱり子供の為についていうふうにできることが一番いいのかなとは思いますがね。」と述べている。これらのことから，多くの指導者は，まず選手を好きになることが重要であり，自分のためではなく選手のために指導することが重要であると考えており，そのために選手と話しやすい関係や環境を整えておく必要があると考えている可能性が示唆された。

また，指導者の伝え方に関して，小峯（1992）は，「良いところは良い，とはっきりと認めてやる。悪いところは悪いと，キチッと叱る。この基本姿勢が指導者にきちっとできてなければいけません。」と述べている。これについて本研究の指導者 E は，「自分のポリシーとして，良いものは褒めますけど，ダメのは徹底して僕は否定しますから。」と述べている。また，指導者 B は，「基本的に妥協はやっぱり良くないと思うんですよね。伝わっていかないと思うし。」と述べている。このことから，指導者は良い悪いの判断基準を明確に持ち，それを明確に選手に伝えることが重要であると言える。

これらのことから，指導者は，サッカーを通した「人間教育」を行う上で，選手との間に話しやすい関係を作り，良し悪しの判断基準を明確に持ち，妥協なく明確に伝えることが重要である可能性が示唆された。

以上述べてきたとおり，多くの指導者は「人間教育」を最も重要視し，その中でサッカーにしっかりと取り組ませることや，指導者と選手が信頼関係を持ち，妥協なく選手に指導していくことが重要であると考えている可能性が示唆された。

2. 特異性

先に述べたとおり，本研究では，指導者の特異性に着目し，分析を行った．先に考察した共通性は，多くの指導者が同じ考えを持っている可能性があり，それによって競技レベルに差異が生まれるとは考えにくい．ここでは，指導者の特異性が競技レベルとどのような関係にあるかという観点から，考察を進めていくこととする．

まず，指導者が特異性を持つことに関して，小峯（1992）は，「ふつうのことを考え，ふつうのことをしては，ふつうのことしかできない」と述べ，突出した結果や選手を育てるためには，普通とは異なることをする必要があることを述べている．また，本田（2009）は，「守・破・離」という言葉を用い，次のように述べている．

「『守』とは基本．『破』とは基本から次のステップ，別の流派や別の師に学ぶこと．『離』とは新しい個性を生み出すことを意味します．スポーツも全く同じでしょう．まずは基本を学び，色々な人に学び，やがて応用し，自分流を見出す．指導者も選手もそういう過程を経て，大きく飛躍していくのです．」

つまり，優れた競技成績を収め，優れた選手を育てるには，皆が考える一般的な考えを持ちながらも，そこから脱却していくことが必要であると言える．これは先に述べた「共通性」に関しても同様であり，皆が共通して持っている考えから，一歩踏み出し脱却していくことが，必要であると言える．

ではどのようにしたら「共通性」から脱却できるのであろうか．そのポイントとなるのは，指導者の内省であると考えられる．本研究の指導者Cは，「やってくうちにだんだん色んな部分を考える余裕が出てきて『ああやっぱ，やってることってこういうことなんだろな』っていう考え方

になってきたのかなっていうふうには思いますけどね。」と述べ、指導に対する内省が深まったことにより、練習のやらせ方が変わってきたと述べている。また、指導者 E は、指導者ライセンスの講習会を通じ、指導者自身が変わったことで、県大会ベスト 8 までの道のりは楽になった、と述べている。さらに、指導者 F は、自分が監督になったことで、勝つことにこだわらせるようになった、と述べている。つまり、指導者が自身の指導に対する内省を深めていく中で、だんだんと指導が変わり、本田（2009）が言う「自分流」が見出せてきたのではないかと考えられる。これについて横山・望月（2005）は、「こうした教養を身に付けるためには、多くの選択肢を出来る限り多く体験し、さらに時間をかけて練るということにあるとのことです。つまり自己形成ですね。」と述べている。このことから、指導者が多くの体験を経て、自身の指導を内省し、時間をかけて自分流を作り出すという「自己形成」が、指導者の特異性を生み出す要因になっている可能性が示唆される。また、上田（1992）は、「指導というのはさっきもいったように“焦らず欲張らず”が大鉄則なんですね。ところが、一貫性が持てない時というのは、指導者が“焦ったり欲張ったり”している時なんですね。そのことを指導者自身が分かっているかということですね。」と述べ、指導者が一貫性を持ってぶれないくらいの特異性を持ち、それを一貫性を持って指導することが重要であると述べている。

これらのことから、指導者が自身の指導に対する内省を深め、自身の特異性を生み出し、それを一貫して指導できるかが競技レベルの向上に影響を与えている可能性が示唆された。

v. 結論

本研究では、県大会上位レベル指導者を対象に、その指導者の哲学、価値観、知識、信念、理念について深層的にインタビュー調査を行った。

その結果、県大会上位レベル指導者の特異性が見られる 6 つのコーチング・メンタルモデルが構築された。そのメンタルモデルにおいて、指導者たちは、「人間教育」を最も重要視し、サッカーに「取り組む姿勢」や、指導者の「選手支援」が「人間教育」において大切であると考えていることが明らかとなった。また、インタビューから、指導者が自身の指導に対する内省を深めることで、指導者の考えに特異性が生まれ、特異性をぶれずに一貫して指導することが、競技レベルの向上に影響を与えている可能性が示唆された。しかし、本研究は事例研究に留まり、そのことを他の競技レベルと比較し、検証することができず、県大会上位レベルの事例として明らかにするに留まった。そのため、その点の検証は、これ以降のコーチング・メンタルモデル研究に期待することとする。

しかし本研究は、今まで対象とされなかった競技レベルの指導者に焦点を当て、その指導者が持つコーチング・メンタルモデルを、特異性を含め明らかにできたという点で有意義であったと言える。本研究が、今後のコーチング・メンタルモデル研究の一助となることを願う。

引用文献

- Bloom, G.A. (2002) Coaching demands and responsibilities of expert coaches. In J.M.Silva and D.E.Stevens (Eds.), Psychological foundations of sport. Boston,MA:Allyn and Bacon. p.438-465.
- カーラ・ウィリッグ：上淵寿ほか訳（2003）心理学のための質的研究法入門．培風館：東京， p.202.
- Côté,J.,Salmela,J.,Baria,A.,and Russell,S. (1993) Organizing and interpreting unstructured qualitative data. The Sport Psychologist June7(2):127-137.
- Côté,J.,Salmela,J.,Trudel,P.,Baria,A.,and Russell,S.(1995) The coaching model:A grounded assessment of expert gymnastic coaches' knowledge.Journal of Sport and Exercise Psychology (17):1-17.
- Culver,D.M.,Gilbert,W.D.,Trudel,Pierre.(2003) A decade of qualitative research in sport psychology journals:1990-1999. Sport Psychologist (17).
- FIFA (2010) FIFA World Ranking,
<http://www.fifa.com/worldfootball/ranking/lastranking/gender=m/fullranking.html>, 2010.12.15 閲覧.
- 船橋孝恵（2005）教養としてのスポーツ心理学．徳永幹雄編．大修館書店：東京， p.152.
- Gilbert,W.D.,and Trudel,P.(2004) Role of the coach: How model youth team sport coaches frame their roles. The Sport Psychologist (18):21-43.

- ・ 本田 裕一郎（2009）高校サッカー勝利学．株式会社カンゼン：東京，
p.15， p.186.
- ・ ジョンソン＝レアード， P. N.（1988）メンタルモデル：言語・推論・
意味の認知科学．海保博之監修．産業図書：東京．
- ・ 北村勝朗（2004）「教育情報」の視点による「コーチング」論再考：
ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象と
して．教育情報学研究（2）：71-80.
- ・ 北村勝郎・永山貴洋・斎藤茂（2005）優れた指導者はいかにして選手
とチームのパフォーマンスを高めるのか？質的分析によるエキスパ
ート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築．
スポーツ心理学研究（32）：17-28.
- ・ 小峯忠敏（1992）動！小峯忠敏の熱い風．大貫哲義著．日本テレビ放
送網株式会社：東京， p.229.
- ・ 古沼貞雄（2006）古沼貞雄 情熱．元川悦子著．学習研究社：東京，
p.50.
- ・ 黒田和生（2008）トモニイコウ．アートヴィレッジ：東京， p.24.
- ・ 松田保（2003）一流選手を育てるとはどういうことか．株式会社二見
書房：東京， p.42.
- ・ 森敏明（2002）動きながら識る，関わりながら考える．能智正博ほか
編．ナカニシヤ出版：京都， p.27.
- ・ 大榎克己（2008）サッカー監督の流儀．羽中田昌編．スキージャーナ
ル株式会社：東京， p.111.
- ・ 斎藤重信（2007）盛岡商 斎藤重信発 夢は叶う．ベースボール・マ
ガジン社：東京， p.80.

- ・ 柴田 峯 (2008) サッカー監督の流儀. 羽中田昌編. スキージャーナル
株式会社: 東京, p.226.
- ・ 上田 亮三郎 (1992) 動! 小峯忠敏の熱い風. 大貫哲義著. 日本テレビ
放送網株式会社: 東京, p.110.
- ・ ウヴェ・フリック: 小田博志ほか訳 (2002) 質的研究入門 「人間の
科学」のための方法論. 春秋社: 東京, p.19.
- ・ やまだようこ (2007) 質的心理学の方法. 新曜社: 東京.
- ・ 山本佳司 (2006) 野洲スタイル. 角川書店: 東京, p.22, p.95.
- ・ 横山 勝彦・望月 慎之 (2005) 文化装置としてのスポーツ ―「区
分」社会からの脱却―. 同志社保健体育 (44): p.4.

謝 辞

本論文を作成するにあたり，進みの良くない小生に熱心に手を差し伸べ，ご指導してくださった指導教員の堀野博幸先生に厚く感謝いたします．

本論文は，大変多くの方々の協力を得て提出に至りました．ご指導いただきました堀野研究室先輩の樋口さん，同期の大森君，お忙しい中インタビューにご協力いただきました X 県の高校サッカー指導者の皆様，たくさんの方々のご協力のおかげで，納得のいく研究を進めることができました．本当にありがとうございます．

また，小生に研究活動の時間を与えてくださった X 県細田学園の先生方，サッカー部のスタッフ，生徒たちに心から感謝いたします．

最後に私を温かく育て，支えてくれた両親と，私に様々な出会いを与えてくれたサッカーに感謝いたします．本当にありがとうございます．

2011 年 1 月 13 日

加藤 篤